

『董西廂』から『西廂記』への繼承

——曲辭と構成の側面から——

土屋 育子

佐賀大學

はじめに

本稿は、『西廂記』雜劇が先行作品をどのように受け継いでいるかについて、比較・考察をするものである。

『西廂記』雜劇（以下『西廂記』と略す）が『董解元諸宮調西廂記』（以下『董西廂』と略す）の影響下に成立していることについては、明清時代の文人の著作や近年の研究においてすでに指摘のあるところであり、にもかかわらずここで考察するのは、自明のこととのそしりがあるいは受け取られるかもしれない。しかしながら、管見の及ぶ限り、これまでの兩者の比較研究では部分的な指摘に留まり、部分的な

『董西廂』から『西廂記』への繼承（土屋）

ある状況をもって作品全体の傾向とみなしすぎている感も否めない。やはり、『西廂記』及び『董西廂』の作品全体を視野に入れながら、各巻・各折ごとの異同状況を踏まえ、兩作品の關係性を明らかにしていく必要があると考える。

というのも、本論の結論を一部先取りすれば、『西廂記』は『董西廂』をそっくりそのまま利用しておらず、單に『董西廂』を劇化した作品ではないからである。つまり、『西廂記』の作者あるいは編纂者は『董西廂』を十分に読み込み、如何に『董西廂』を利用して雜劇として再構成したらいかを考え、『西廂記』を書いたことがうかがえるのである。こうしたことから、本稿では、『西廂記』『董西廂』全體にわたる語句・表現の分布・使用状況を明らかにした上で、『西廂記』における『董西廂』の影響を改めて考察することを主たる目的としたい。

利用したテキストは、次の通りである。『董西廂』は、『董解元西廂記諸宮調』研究（汲古書院、一九九八。以下『研究』と略す）を用い、引用時にはその通し番號に據った。例えば、「卷一、第一番目の套數、第1曲」は、一・

一ととする。『西廂記』は、弘治本（適宜、他の版本との校勘も行う）を用い、引用時には、弘治本の折分けに準じ、卷一第一折【賞花時】は、1-1【賞花時】とする。

關係する箇所については、『董西廂』『西廂記』それぞれの電子データを用いて調査した。また、王驥徳『新校注古本西廂記』（萬曆四十二年序。以下、王注と略す）の注も利用した。この王注は各折ごとに附され、語句の解説のほか、他の作品における用例を示しているだけでなく、『西廂記』が基づく『董西廂』の曲辭に關する指摘も附されている。そこで、對照表では王注が指摘する『西廂記』と『董西廂』の類似箇所については、すべて掲げることとした（表3「曲辭對照表」では、王注によるものは行頭に*を附す）。さらに、『研究』及び焦循『劇說』で指摘されている箇所についても、それぞれページを注記する。なお、對照表作成に当たっては、上記『研究』のほか、王季思校注『西廂記』（上海古籍出版社、一九七八）などの先行研究を參照させていただいた。

一 全般的な傾向

まず、『董西廂』と『西廂記』の内容面での違いについて、内容對照表（表1）に示す。傍線部は異なる箇所、二重傍線部はどちらか一方にのみ見えることを表す。

これを見ると、物語の流れは大筋でほぼ一致するが、明らかに異なっている部分が何箇所か存在していることがわかる。まず冒頭、通し番號1の『董西廂』では、鶯鶯一行は棺を守って都に赴く途中であるが、『西廂記』では、博陵に向かう途中で普救寺に滞在している。また、通し番號9から12に見える「張生が鶯鶯と間違えて紅娘に抱き付く」場面から「張生が壁を乗り越え鶯鶯に叱責される」場面にかけて順番が異なっている。『董西廂』卷四では別の日の出來事、つまり、9「鶯鶯と紅娘が張生の琴を聞く」↓12前半「張生が間違つて紅娘に抱き付く」↓10「翌日紅娘が張生を訪ねる」↓11「張生と鶯鶯が手紙のやりとりをする」↓12後半「その夜、張生が壁を乗り越えて、鶯鶯に叱責される」という順であるのを、『西廂記』では、卷三

表1 『董西廂』と『西廂記』内容対照表

凡例・傍線部：『董西廂』『西廂記』双方で異なる箇所 一 重傍線部：一方にしか見えない場面

u003c/pu003e

番 號	通 し	董 西 廂	卷 數	弘治本西廂記	
				あらすじ	卷折(括弧内は西廂記諸本の齣數)
1	一・二六 一・二五	張生が登場。蒲州に立ち寄り、普救寺へ脚を伸ばす。普救寺に滞在する鶯鶯を見つけ、すっかり心を奪われる。崔家の者たちは故相國の棺を守って、都へ赴く途中であった。	一・二六 一・二〇	張生は、普救寺の僧法本に、間借りしたいと依頼。	崔家の老夫人・鶯鶯らが登場。夫の棺を守って博陵に向かう途中、普救寺に滞在している。 張生が登場。蒲州の普救寺を見て回っているとき、鶯鶯の姿を垣間見て、心を奪われる。
2	一・二一 一・二二	張生は鶯鶯の姿を見つけ、紅娘と言葉を交わす。張生の詩に、鶯鶯が和す。その後、張生は戀煩いで病に臥せる。	一・二一 一・二〇	張生は鶯鶯に近づくため、普救寺に宿を取ることに決める。	鶯鶯が紅娘と共に庭で香を焚き、天に祈る。張生が二人の姿を見つけ、詩の應酬をする。
3	一・三一 一・三二	法事が行われ、鶯鶯の姿に魅了された張生や僧らは狂態をみせる。	一・三一 一・三五	老夫人らが法事を行うが、美しい鶯鶯の姿に、張生も僧たちも我を忘れる。	老夫人らが法事を行うが、美しい鶯鶯の姿に、張生も僧たちも我を忘れる。
4	二・一 二・二 二・三	反亂軍は普救寺に立ち寄り、鶯鶯の事を知って、彼女を要求する。 法聰が出撃して、反亂軍に對抗する。 張生が反亂軍を追い拂う策を獻じる(法聰が杜將軍に手紙を届ける)。	二・一 二・二 二・三	反亂軍の孫飛虎が鶯鶯を要求してくる。軍を退ける策があると、張生が名乗り出る。	反亂軍の孫飛虎が鶯鶯を要求してくる。軍を退ける策があると、張生が名乗り出る。
5	三・一 三・二 三・三	杜確將軍が駆けつけ、反亂軍は逃げていく。	三・一 三・二 三・三	張生が杜確將軍へ手紙をしたため、恵明が使者に立つ。杜確が救援に駆けつける。	張生が杜確將軍へ手紙をしたため、恵明が使者に立つ。杜確が救援に駆けつける。
6	三・七 三・一〇	老夫人が張生を招く。	三・七 三・一〇	老夫人が紅娘に命じ、張生を宴に招く。張生は喜んで出かける。老夫人は謝意を述べる。	老夫人が紅娘に命じ、張生を宴に招く。張生は喜んで出かける。老夫人は謝意を述べる。
7	三・一 三・二 三・三	老夫人は、鶯鶯姉弟に、張生を兄とするように言う。約束が違ふと氣色ばむ張生に、鶯鶯にはすでに鄭恒という許婚があると説明する。	三・一 三・二 三・三	鶯鶯も出て来て、張生は期待に胸を膨らませる。ところが、老夫人は二人に兄妹の契りを結ばせ、鶯鶯には鄭恒という許婚があると説明する。張生はショックを受けて出て行く。	鶯鶯も出て来て、張生は期待に胸を膨らませる。ところが、老夫人は二人に兄妹の契りを結ばせ、鶯鶯には鄭恒という許婚があると説明する。張生はショックを受けて出て行く。
8					

『董西廂』から『西廂記』への繼承(土屋)

9	<p>三・二三 一三・二七 四・二一 一四・六 (後の四・七に續く)</p> <p>紅娘は、琴で鶯鶯の氣を引くようにと、張生に秘策を授ける。 夜中に出て来た鶯鶯と紅娘は、窓の外で張生の琴を聞く。</p>	2 5(8)	<p>紅娘は、張生に琴で鶯鶯の氣を引くようにと秘策を授ける。(諸本はここまでが第七齣。次から第八齣)夜中、鶯鶯らが焼香に現れ、窓の外で張生の琴を聞くが、慌ただしく歸って行く。 鶯鶯は張生が病に臥せったことを知り、紅娘に言いつけて張生を見舞わせる。張生は鶯鶯への手紙をしたため、紅娘に託す。</p>
10	<p>四・一〇 一四・二三</p> <p>鶯鶯が張生を想う様子を見かねた紅娘は、張生のもとを訪れ、鶯鶯の本心を伝える。張生の手紙を持って、鶯鶯の元へ歸る。</p>	3 1(9)	<p>張生からの手紙を読んだ鶯鶯は、ひどく腹を立て、紅娘を叱責する。そして、手紙をしたためると、紅娘に張生の元へ持って行かせる。 張生は、鶯鶯の詩をみて、今夜こそ鶯鶯との逢瀬が實現すると喜ぶ。</p>
11	<p>四・一三 一四・一六</p> <p>張生は、鶯鶯の詩をみて、今夜こそ鶯鶯との逢瀬が實現すると喜ぶ。</p>	3 2(10)	<p>張生は、鶯鶯の詩をみて、今夜こそ鶯鶯との逢瀬が實現すると期待に胸を膨らます。 紅娘が鶯鶯に張生の様子を語り、手紙を渡す。鶯鶯は腹を立てるが、すぐに張生宛の手紙を書く。 紅娘がまた張生を訪ねる。張生は、鶯鶯の詩をみて、今夜こそ鶯鶯との逢瀬が實現すると期待に胸を膨らます。</p>
12	<p>一四・七七 一四・九一 一四・一七 一四・二五</p> <p>張生は、鶯鶯との逢瀬を夢に見る。 病に臥せる張生を、大師(普救寺の僧)や紅娘が見舞う。 病氣の張生を、夫人と鶯鶯が見舞う。二人が歸つた後、張生は自殺を圖るが、やつてきた紅娘に止められる。 紅娘は、鶯鶯からの手紙を渡す。手紙には詩が書いてあった。張生は、鶯鶯が今夜逢引するつもりだと喜ぶ。 紅娘を連れて鶯鶯が張生の元を訪れる。二人は思いを遂げる。次の晩も、鶯鶯は張生に逢いにやつてきた。 二人は名残を惜しみつつ別れる。</p>	3 3(11)	<p>鶯鶯と紅娘が、夜、焼香に出てくる。紅娘が合圖の鳥の鳴きまねをすると、張生は誤って紅娘に抱き付く。 紅娘が手引きして、張生は壁を乗り越える。ところが、鶯鶯は張生を厳しく叱り付けて立ち去る。張生はがっかりして書齋に戻る。</p>
13	<p>五・一 一五・六</p> <p>張生は、鶯鶯との逢瀬を夢に見る。 病に臥せる張生を、大師(普救寺の僧)や紅娘が見舞う。 病氣の張生を、夫人と鶯鶯が見舞う。二人が歸つた後、張生は自殺を圖るが、やつてきた紅娘に止められる。 紅娘は、鶯鶯からの手紙を渡す。手紙には詩が書いてあった。張生は、鶯鶯が今夜逢引するつもりだと喜ぶ。 紅娘を連れて鶯鶯が張生の元を訪れる。二人は思いを遂げる。次の晩も、鶯鶯は張生に逢いにやつてきた。 二人は名残を惜しみつつ別れる。</p>	なし	<p>張生が重病だと聞き、夫人は醫者を呼ぶ。 鶯鶯も紅娘に言いつけて薬の處方箋を張生に届けさせる。 張生は處方箋(實は今夜逢いに來るといふ内容の詩)を読むやたちまち元氣になり、今宵こそ事が成就すると期待する。</p>
14	<p>五・七 一五・一七</p> <p>張生は、鶯鶯との逢瀬を夢に見る。 病に臥せる張生を、大師(普救寺の僧)や紅娘が見舞う。 病氣の張生を、夫人と鶯鶯が見舞う。二人が歸つた後、張生は自殺を圖るが、やつてきた紅娘に止められる。 紅娘は、鶯鶯からの手紙を渡す。手紙には詩が書いてあった。張生は、鶯鶯が今夜逢引するつもりだと喜ぶ。 紅娘を連れて鶯鶯が張生の元を訪れる。二人は思いを遂げる。次の晩も、鶯鶯は張生に逢いにやつてきた。 二人は名残を惜しみつつ別れる。</p>	4 1(13)	<p>鶯鶯が紅娘を伴って、張生のもとを訪れ、二人はついに思いを遂げる。(『西廂記』では逢瀬は一回のみ)</p>
15	<p>五・一九 一五・二五 六・一</p> <p>張生は、鶯鶯との逢瀬を夢に見る。 病に臥せる張生を、大師(普救寺の僧)や紅娘が見舞う。 病氣の張生を、夫人と鶯鶯が見舞う。二人が歸つた後、張生は自殺を圖るが、やつてきた紅娘に止められる。 紅娘は、鶯鶯からの手紙を渡す。手紙には詩が書いてあった。張生は、鶯鶯が今夜逢引するつもりだと喜ぶ。 紅娘を連れて鶯鶯が張生の元を訪れる。二人は思いを遂げる。次の晩も、鶯鶯は張生に逢いにやつてきた。 二人は名残を惜しみつつ別れる。</p>	なし	なし

22	21	20	19	18	17	16
七・一一二 一八・一四 (おわり)	七・九 一七・一一一	七・七 一七・八	六・二七 七・一 一七・六	六・二〇 一六・二七	六・一三 一六・一九	六・一 一六・一二
張生と鶯鶯はめでたく婚禮を挙げ、任地へ旅立つ。	張生は病氣のわが身を歎く。鄭恒が登場。張生が大臣の娘を娶ったと、偽りの情報を伝える。老夫人は鄭恒に、鶯鶯との婚儀を許す。そこへ、張生が現れる。鄭恒との婚禮が決まったと聞き、鶯鶯と張生は互いに視線を交わし、心を痛める。二人は首を吊ろうとするが、法聰が慌ててなだめる。太守となった杜確が、役所で鄭恒を尋問し、嘘が露顯した鄭恒は自害する。	張生は病に伏せていたが、下僕の持ってきた鶯鶯からの贈り物を見て喜ぶ。	張生は病氣になつていたが、張生の合格を聞き、贈り物を用意して下僕に託して送り出す。張生は翰林學士の職を授けられるが、重い病に罹る。病に伏せる張生のもとに、鶯鶯からの贈り物が届き、張生は喜ぶ。	翌年、張生は三番で合格する。張生は鶯鶯へ科擧合格を知らせる。鶯鶯は病氣になつていたが、張生の合格を聞き、贈り物を用意して下僕に託して送り出す。張生は翰林學士の職を授けられるが、重い病に罹る。病に伏せる張生のもとに、鶯鶯からの贈り物が届き、張生は喜ぶ。	旅の宿で、張生の夢に鶯鶯が現れる。追つ手がやつてきたところで目が覺め、張生は愁いに沈む。一方の鶯鶯も、張生を想つてやつれ、悲しみを深める。	半年後、奥方は鶯鶯の容姿の變化に氣がつき、張生との仲を疑う。老夫人は、紅娘を呼び出し問い詰める。逆に紅娘は、二人をかばい、老夫人を説得する。張生は紅娘のアドバイスで、法聰から借金をして作った結納金を老夫人に手渡す。また、自ら長安へ科擧を受けに行くことを宣言する。
5 4 (20)	5 3 (19)	5 2 (18)	5 1 (17)	4 4 (16)	4 3 (15)	4 2 (14)
張生は華やかな行列を従えて戻ってくるが、老夫人から鶯鶯と鄭恒の婚約がすでに決まったと聞き愕然とする。杜將軍がやつてきて、張生の潔白を證言する。鄭恒は嘘が露顯したことを知り、木に頭を打ち付けて自害する。張生と鶯鶯はめでたく婚禮を挙げ、任地へ旅立つ。	張生は華やかな行列を従えて戻ってくるが、老夫人から鶯鶯と鄭恒の婚約がすでに決まったと聞き愕然とする。杜將軍がやつてきて、張生の潔白を證言する。鄭恒は嘘が露顯したことを知り、木に頭を打ち付けて自害する。張生と鶯鶯はめでたく婚禮を挙げ、任地へ旅立つ。	張生は病に伏せていたが、下僕の持ってきた鶯鶯からの贈り物を見て喜ぶ。	張生は病に伏せていたが、下僕の持ってきた鶯鶯からの贈り物を見て喜ぶ。	夢から覺めた張生は、鶯鶯を懐かしむ。	科擧に赴く張生を、皆で見送る。鶯鶯と張生は、將來を誓い合つて別れる。	老夫人は、最近鶯鶯の様子が變つたことに氣がつき、紅娘を呼び出して問い詰める。真相が明らかとなり、さらに鶯鶯を呼び出し叱責する。老夫人は張生も呼び出し、科擧に合格しなければ娘を嫁がせないと條件を出す。

表2

董西廂引用數	使用箇所の数	卷・折
14	8	1-1
11	8	1-2
18	12	1-3
10	6	1-4
9	8	2-1
5	5	2-2
5	4	2-3
7	5	2-4
5	4	2-5
8	6	3-1
8	5	3-2
6	5	3-3
8	6	3-4
14	10	4-1
11	9	4-2
16	11	4-3
12	11	4-4
7	6	5-1
7	5	5-2
2	2	5-3
2	2	5-4
185	138	計

第三折でひとつながりの場面に改變されているのである。

これは、張生の二つの失敗を連ねて物語のクライマックスをこの場面に集中させることで、構成にメリハリをつけたと考えられる。また通し番號14では、『董西廂』では張生が自殺を圖つて止められる場面があるが、『西廂記』ではこの場面は取り入れられていない。このほか、通し番號16の張生が科擧を受けに行く場面では、『董西廂』では張生自ら申し出ているのだが、『西廂記』では鶯鶯の母である老夫人が鶯鶯との結婚の條件として、科擧に及第し役人になることを提示している。この點は意外に見過ごされやすいが、老夫人の性格づけの違いが現れていると言えよう。

すなわち、『董西廂』の老夫人は、故相國の遺言としてすでに鄭恒が許婚であるという道義上、張生・鶯鶯の結婚を拒否しているに過ぎず、だからこそ張生自ら科擧受験に赴くことを申し出ることになるのだが、『西廂記』の老夫人は、科擧及第という新たな條件を提示しており、むしろ二人の關係に積極的に關わる姿勢が見られると言えるのである。末尾の

通し番號22には、『董西廂』では二人が絶望して自殺しようとする場面や戀敵の鄭恒を杜確が裁く場面があるが、『西廂記』では自殺未遂の場面は無く、杜確は單に證言をするだけとなっている。

次に、語彙・表現の面から、兩者を比較してみよう。本稿末尾の曲辭對照表(表3)に、『西廂記』が『董西廂』の表現を踏まえていると考えられる箇所を對照して示した。無論、兩者はストーリー展開が共通しているのであるから、語彙・表現が似通う部分が多いのは當然ではあるが、ここではそのような類似箇所もあえて含め抽出することとした。表は左側から、『西廂記』の卷・折および曲牌、曲辭を擧

げ、次に典據となった『董西廂』の句を示している。曲辭對照表に基づき、類似箇所を調べると表2のようになる。

「使用箇所の數」は、『董西廂』の表現を用いている『西廂記』での數、『董西廂引用數』は『董西廂』の表現を引用している數だが、一つの曲に複數の引用がなされていることがあるため、このように分けて項目を立てた。この表を見ると、全體的な傾向として、『西廂記』卷一・卷四の各折では十箇所以上指摘できる一方で、卷二・卷三・卷五ではやや少なく、卷五第三折・第四折に至ってはそれぞれ二箇所程度にとどまっていることがわかる。なぜこのように卷・折によってばらつきが見られるのであろうか。

考えられる要因として最も可能性が高いのは、展開の相違である。今度は逆に、『西廂記』における引用數を、『董西廂』の各卷ごとに直して挙げてみよう。

『董西廂』卷一：38	卷二：4	卷三：15
卷四：25	卷五：17	卷六：25
卷七：7	卷八：3	

『董西廂』から『西廂記』への繼承(土屋)

一見して明らかなのは、卷二・卷七・卷八からの引用數が、極端に少ないことである。これは、内容的に對應する折が、實際にどのようなストーリー展開なのかということと、少なからず關係があるように思われる。

まず、『董西廂』卷二からみてみよう。卷二は、反亂軍が普救寺に押し寄せ、張生が賊軍退散の祕策を獻じる場面である。『西廂記』で内容的に對應するのは、卷二第一折(弘治本の場合。余瀟東本などでは第五齣の前半)だけである。さらに、異なる場面での引用も、卷二の場合はほとんどないため、結果として引用數が減るのやむをえないのかもしれない。

次に『董西廂』卷七であるが、ここでは張生が科擧に合格したものの病氣にかかり、半年もの間驛亭で療養しており、そのすきに鄭恒(鶯鶯の従兄弟で、老夫人の甥)が老夫人(鶯鶯の母)に嘘の注進をして鶯鶯との結婚を取り付ける場面である。『西廂記』で内容的に對應するのは、卷五第一折から第四折前半までである。まず、卷五第一折・第二折に見える『董西廂』に基づく曲辭は、異なる場面から

持つてきたものであり、内容的に對應する卷七から直接取り入れている箇所は非常に少ない。第三折・第四折になると、『董西廂』から直接取り入れた曲辭は極端に少なくなる。これは、内容的に兩者に違いがあるためと考えられる。第三折は、鄭恒が自分こそ鶯鶯の許婚にふさわしいと盛んにアピールするのに對し、紅娘は野暮な鄭恒を嫌い、張生の色男ぶりを述べて言い返すという内容であるが、『董西廂』の該當箇所には、もともと紅娘が鄭恒とやりとりをするということはなく、語り手が鄭恒の野暮ぶりを語るのみである。また、第四折は、張生が普救寺に戻り、駆けつけた杜確が張生の潔白を證言したので、晴れて張生と鶯鶯は結婚するという内容である。『董西廂』では卷八が對應し、ここは僧侶の法聰が張生を慰め、さらには、杜確が先の賊軍追討の功で太守となり、役所で鄭恒の一件を裁くという話となっており、『西廂記』と比べると細かな設定で異なる点が多い。このように物語の展開が異なるために、『董西廂』卷八から『西廂記』に直接取り入れられた曲辭も自然と少なくなつたと考えられる。

二 『西廂記』における『董西廂』の利用

全體にわたる曲辭の對照を行うことにより、『西廂記』が『董西廂』の曲辭を單に取り入れているのではなく、卷や折によって引用數に偏りがあり、しかもそれが内容と關係することが明らかとなつた。では次に、『西廂記』における『董西廂』の利用には、どのような特徴があるのかについて考察してみよう。

表3 「『西廂記』『董西廂』曲辭對照表」に、『西廂記』と『董西廂』の對應する箇所を並べて示してみた。對應状況のパターンは、便宜的に大きく次の①～④のように分類する。

- ① ほぼ同様の場面での使用
- ② 曲辭は似るが、場面・主體を變更
- ③ 表現に手を加え、場面・主體を變更
- ④ 定型表現・語句のみの使用

全てをここに擧げることではできないので、**表3**にそれぞれの對應状況のパターンにあてはまるものを示している。

全體的な状況は、そちらを御覽いただきたい。ここでは、④の定型表現・語句のみの使用にとどまるものを除いて、①～③について代表的な具體例をいくつか挙げ、それぞれについて分析を試みたい。引用例は、先に『西廂記』を挙げ、次に基づく『董西廂』の表現を挙げる。對應箇所には、傍線・波線などを附した。

① ほぼ同じ場面での使用

例 1

『西廂記』	『董西廂』
<p>1-1-1 【油葫蘆】「生唱」竹索纜浮橋、水上蒼龍偃。(張生唱う) 竹網結ぶ浮橋は、水面に伏せる蒼い龍。(冒頭、張生が登場する場面)</p>	<p>一・四2 【尾】 正是黃河津要。用寸金竹索纜着浮橋。(これぞ黃河の要津、鎖と竹の綱もて浮橋つなく)。(冒頭、張生が登場する場面)</p>

張生の登場シーンでの風景描寫であるが、『董西廂』が語り手による地の文であるのに對し、『西廂記』では張生自身が唱う部分となっている。このようにしたのは、『董西廂』の風景描寫が、もともと張生の目を通したものであ

『董西廂』から『西廂記』への繼承(土屋)

るため、張生自身が語るという形式に變更しても不自然とはならないからであらう。

例 2

<p>3-1-1 【后庭花】「紅唱」我則道拂花牋打稿兒、元來他染霜毫不勾思。先寫下幾句寒溫序、後題着五言八句詩。…… 3-1-1 【青歌兒】「紅唱」顛倒寫鴛鴦鴛鴦兩字。…… 〔紅娘唱う〕めでたき箋紙を拂い廣げ下書きを書くかと思いきや、霜なす筆を墨で染め構想を練りもせず。まずは時候のあいさつをつづり、あとには八句の五言詩を書き記す。……〔紅娘唱う〕逆さまに鴛鴦の二文字を書き付ける。〔病に臥せった張生を、鴛鴦に言いつかつた紅娘が見舞い、張生が鴛鴦への手紙をしたためる場面〕</p>	<p>四・一三【雙調】【御街行】……拂拭錦箋一紙。筆頭灑落相思淚、盡寫心間事。○也不打草不勾思。先序幾句俺傳示一揮揮就一篇詩。筆翰與羲之無二。須臾和淚一齊封了上面、顛倒寫一對鴛鴦字。(錦箋の紙を拂い廣げる。筆先より滴り落ちるは戀の涙、心の中なる事どもをあますことなく書き記す。○下書きもせず構想も練らず、まずはわが思いを訴えること數句。ひとたび筆を揮うごとに一篇の詩生まれ、筆使いは王羲之に異ならず。たちまちにして涙とともども封をして、上には鴛鴦の二文字をさかさまに記す)〔様子を見にきた紅娘に鴛鴦への手紙</p>
--	---

を託そうと、張生が手紙を書く場面」

この例では、『西廂記』『董西廂』ともにほぼ同じ場面であり、『西廂記』は『董西廂』の文言をほとんどそのまま踏襲している。異なるのは、これを語る人物である。『董西廂』は地の文であり、語り手（實演ならば諸宮調の藝人）が語ることになる。一方、『西廂記』では、紅娘が張生の様子を唱って描寫する形となっている。では、『西廂記』が紅娘に唱わせる形にしているのは、なぜなのだろうか。一つには、そもそもこの折（卷三第一折）は、紅娘が張生の元へ赴くところから始まり、紅娘が主たる唱い手であるからということが大きいかと思われる。しかし、もう一つの要因として、雜劇『西廂記』がもとづく『董西廂』が語りものであるということも関係しているのではなからうか。つまり、語りものの地の文は、語り手という第三者の視点から登場人物が描寫されることが多い。これを自然な形で雜劇に取りこもうとしたとき、鶯鶯・張生以外の第三者である紅娘の視点からの描寫とするのが、最も都合がよ

かったのではなからうか。

例3

<p>4-13【端正好】「且唱碧雲天、黃花地。西風緊、北鴈南飛。曉來誰染霜林醉。總是離人淚。（鶯鶯唱う）碧雲の天、黃花の地。西風きびしく吹きすぎ、北の雁が南に飛ぶ。曉方に誰が染めたか霜おく林の酔いし色、すべてこれ別れる人の涙。」</p> <p>4-13【耍孩兒】「且唱」未飲心先醉。眼中流血、心内成灰。（鶯鶯唱う）飲まぬさきから心は酔ったよう。眼には血の涙があふれ、心の中は灰と化す。「上京する張生を鶯鶯が見送る場面」</p>	<p>六・一四2【尾】莫道男兒心如鐵。君不見滿川紅葉。盡是離人眼中血。（男子の心は鐵の如しと言いたもうな。君見ずや一面の紅葉、ことごとく別れ行く人の眼中の血なるを。）</p> <p>六・一七1【大石調】「鶯山溪」斯覲者、總無言、未飲心先醉。（見つめ合うも言葉無く、飲むより先に心はは酔いしれる。）「科擧受験のため上京する張生を、鶯鶯が見送る場面」</p>
---	---

いずれも、科擧の受験のために上京する張生を、鶯鶯が見送る場面である。

『董西廂』の「君不見滿川紅葉。盡是離人眼中血」は、

蘇軾の【水龍吟】詞「細看來、不是楊花點點、是離人淚（細かに見れば、小さな一枚一枚の楊花〔水面に落ちた柳絮〕ではなく、別れる人の涙）」（なお、【水龍吟】末尾の句形には異説があり、「細看來不是楊花、點點是、離人淚」、「細看來不是、楊花點點、是離人淚」などが言われている）を踏まえると言われている。^②これを『西廂記』では、【端正好】「總是離人淚（すべてこれ別れる人の涙）」としており、あたかも『董西廂』の表現が、典拠である蘇軾の句に戻っているかのように見える。しかし、後の【耍孩兒】に「眼中流血」という句があり、ここで『董西廂』の「盡是離人眼中血」を利用して、可能性が考えられるのである。

ところで、蘇軾の【水龍吟】詞には典拠がある。南宋の人曾季狸の『艇齋詩話』^③は、「東坡和章質夫「楊花」詞云……「細看來不是楊花、點點是離人淚」。即唐人詩云、時人有酒送張八、惟我無酒送張八。君有陌上梅花紅、盡是離人眼中血。皆奪胎換骨手」と指摘している。唐人の名は不明で、他に同様の記事があるのかも不明だが、『艇齋詩話』の説が正しければ、典拠となった詩詞と『董西廂』の

句および『西廂記』の句の關係は、次のように考えることが出来る。すなわち、『董西廂』の「君不見滿川紅葉。盡是離人眼中血」は、蘇軾【水龍吟】詞を意識しつつ、唐人詩「君有陌上梅花紅、盡是離人眼中血」に基づくものであり、そして『西廂記』は、唐人詩を典拠とする蘇軾詞に基づいて『董西廂』の句を「是離人淚」と改め、さらに後の【耍孩兒】で「眼中流血」の句を取り入れたのではなからうか。なお、【耍孩兒】では、第一句「淋漓襟袖啼紅泪」とすでに「紅泪」が使われ、第八句「眼中流血」と類似する表現となっている。また、【耍孩兒】第八句・第九句「眼中流血、心内成灰」は、『煙花錄』を典故とする表現である。^④このようなことから、【端正好】で「離人淚」と改められたのには、幾つかの要因が重なっていると考えられる。

『西廂記』が試みたこの方法が成功しているか否かはひとまずおくとして、唐人詩、蘇軾詞、『董西廂』の句を関連させつつ、あえて前半と後半に分けて配置した可能性は十分考えられるであろう。こうすることにより、観客また

は讀者の意表を突こうとしたのかも知れない。

なお、【耍孩兒】は、張生が唱うとするものと、鶯鶯が唱うとするものの兩方のテキストがある。張生が唱うのであれば、先に鶯鶯が唱う「總是離人淚」を、後から張生が「眼中流血」と補う形になり、趣向としてはおもしろい。なお、弘治本では、張生が唱うことになっている。

以上舉げた例1~3のほか、同様の場面で同じ文句を使用している例としては、張生と鶯鶯がやりとりする詩句が挙げられる。ただし、詩の應酬は、物語の重要な要素であり、展開の鍵となつていたので、手を加えたり使用する場所を變更することはしなかつたということであろう。

② 曲辭は似るが、場面・主體を變更

例 4

1-11【么】「旦唱」門掩重關蕭寺中。花落水流紅。（鶯鶯唱う）門が幾重にも閉ざす寺のうち、落花に水の流れはくれないに染む。「冒頭、鶯	一・一四2詩・門掩重關蕭寺中、芳草花時不曾出。（門が幾重にも閉ざす寺のうち、芳草花時かつて出でず。）「張生が鶯鶯を垣間見た後、李紳
--	---

鶯の登場場面」

「鶯鶯本傳歌」を引くところ」

『董西廂』では詩中の表現であつたものを、『西廂記』では、詩中で描寫されていた人物、つまり鶯鶯の唱としており、主體の變更がなされている例である。

例 5

2-11【油葫蘆】「旦唱」 ……這些時睡不安、坐又不寧、我欲待登臨不快、閑行又悶。 每日價情思昏昏。（「鶯鶯唱う」このとき私は寝ても覺めでもころ休まらず、高きに登ろうともころは晴れず、散歩しようにもうつうつとする。毎日物思いにうつらうつら。）	一・二七4【尾】待登臨又不快閑行又悶。坐地又昏沈睡不穩。子倚着箇鮫綃枕頭兒盹。（高きに登ろうとしても快からず、散歩しようともつらく、すわればクラクラ、眠りも安からず。ただ鮫綃の枕に居眠りするのみ）「普救寺の僧から鶯鶯のことを聞き、張生がますます思いを募らせる場面」
---	--

〔張生を見かけてから、鶯鶯が物思いに沈む場面〕

表現はよく似通うが、『董西廂』では、張生が鶯鶯を戀しく思うあまり狂態を演じているのを描寫しているのに対して、『西廂記』では、鶯鶯が戀に目覚める様子を描寫している。この『董西廂』は、本来女性の行爲に使う語彙や表現を、男性である張生を主體として使用しており、一種のパロディ的場面であるが、ここでは、場面を變えると同時に主體の變更も行い、鶯鶯の戸惑いや物憂さを描寫する。これは、演劇ではあまり度が過ぎるのは好ましくないと考えられたからかもしれないが、結果的にパロディ的要素は影を潜めた形になっている。

例6

4-13 【快活三】〔旦唱〕
將來的酒共食。嘗着似土和泥。
假若便是土和泥。也有些土氣
息。泥滋味。（〔鶯鶯唱〕）
せつかく運んだ酒と看さえ、

三・一九一 【商調】〔玉抱肚〕
酒來後、滿盞家沒命飲、
面磨羅地甚情緒。喫着下酒、
沒滋味、似泥土。（酒が來れば、
杯満たしてむやみにあおり、

〔董西廂〕から『西廂記』への繼承（土屋）

土や泥を嘔むおもしろい。たとえこれが泥土であっても、土のかおり泥のおいがあるものだろう。〔鶯鶯らが科擧受験に旅立つ張生を見送る場面〕

顔をこわばらせて何の風情もない。肴を食べながら、うま味もなく、砂を嘔むよう。〔鶯鶯との結婚を老夫婦に拒否された張生を描寫する場面〕

この例でも、場面の變更とともに、主體の變更が行われている。『董西廂』では、張生は、反亂軍の撃退を條件に鶯鶯との結婚の約束をとりつけたはずが、後になって、老夫人から鶯鶯には従兄弟の鄭恒が許婚となっていることを理由に拒否され、自暴自棄氣味に酒を飲む場面である。一方の『西廂記』では、主體は鶯鶯に變わり、科擧受験のため長安へ旅立つ張生を見送る鶯鶯の心情を描寫している。

例7

5-12 【醉春風】〔生唱〕
……鶯鶯呵、你若是我害相思。我甘心兒死。死。四海無家、一身客寄。半年將至。（張生唱う）鶯鶯よ、もしもあなたがわが戀の病いを

五・二一 【中呂調】〔踏莎行〕
鶯鶯你還知道我相思。甘心為你相思死。（鶯鶯よ、あなたが私の戀い焦がれる思いを知ってくれたなら、私はあなたのために焦がれ死にして

知ってくれたら、私は死んでも悔いはない。四海に家は無く、孤獨の身は旅にあり、ここにて早くも半年過ぎる。)

〔科擧に合格したものの、鶯鶯を戀うあまり病氣になった張生の唱〕

も本望だ。)(鶯鶯との逢瀬を夢に見て、眼が醒めたあとと張生のことば)

一・二六一【雙調】【豆葉

黃】病裏逢春、四海無家、一身客寄。(病中春にめぐりあり、四海に家無く、孤獨の身旅路にあり。)(初めて鶯鶯を垣間見て、戀い焦がれる張生のことば)

五・五二【尾】沒親熟病染沈痾。可憐我四海無家獨自箇。怕得工夫肯略來看覩我麼。(友もなく重い病にかかり、あわれ四海に家無き孤獨の身。)(鶯鶯との逢瀬を夢に見た後、病に伏せた張生のことば)

ここに擧げた『西廂記』卷五第二折では、科擧に合格した後、張生は鶯鶯戀しさに病となり、鶯鶯の元へ歸ることが出来なくなっている。一方、『董西廂』で對應するのは卷七であり、展開は似通うが、病の原因は示されていない。

『西廂記』が直接基づいたのは、『董西廂』卷七ではなく、卷五の張生が逢瀬を夢に見た後、鶯鶯に戀い焦がれて病に臥せる場面である。『西廂記』では、張生の科擧及第後、鶯鶯に戀い焦がれて病を發するというわけだが、病氣になるという点では共通することから『董西廂』卷五の文句が使われていることになる。したがって、『西廂記』はおそらく状況が似通う場面を設定した上で、基づく場面から詩句を求め、さらに五・五二にある「四海無家獨自箇」をヒントに、類句である一・二六一の「四海無家、一身客寄」を利用することを思いついたのではなからうか。『董西廂』の對應箇所(卷七)も、病に苦しむ張生の心中が縷々述べられ、例えば「天遙地遠。萬水千山。故人何處(はるかに遠く、あまたの山川隔てた彼方に、なつかしき人はいずこ)」(七・七一【仙呂調】【別銀燈】。【研究】「三六六頁」で、宋・徽宗【燕山亭】詞が出典であると指摘)などは、張生の強い悲壯感・孤獨感を表している点で「四海無家、一身客寄」に劣らない。とすれば、『西廂記』の作者は同様の状況を表現するにあたり、『董西廂』の表現に匹敵しうる詩句を比

較的うまくあてはめられていると言えるかもしれない。

例 8

<p>2-15 【綿搭絮】「巨唱」疎簾風細、幽室燈清。都則是一層兒紅紙、幾枕兒疎檣、兀的不是隔着雲山幾萬重。（鶯鶯唱う）目の粗い御簾に風がそよぎ、薄暗い部屋に燈火は清らかにともる。わずか一重の紅紙と、あらきれんじの窓枠が、幾萬重にも重なる雲山に隔てられたることくに思われる。）「鶯鶯が窓の外で張生の琴を聞き、張生の部屋の様子を描寫」</p>	<p>四・三-1 【中呂調】【滿庭霜】幽室燈清、疎簾風細、獸爐香熱龍涎。抱琴拂拭、清興已飄然。（薄暗い部屋にともしび清らかな光を投げ、目の粗いすだれよりかすかに風は吹き込み、黙かたどる香爐に焚くは龍涎香。琴を抱いて拭えば、はや清興飄然としてわきおこる。）「張生が琴を弾こうとする場面で、自分の部屋を描寫」</p>
--	--

老夫人に鶯鶯との結婚を拒否された後、紅娘のアドバイスに従い、張生が琴を弾く場面。夜外に出て来た鶯鶯と紅娘は、張生の部屋の窓の外で張生の琴を聞いている。『董西廂』では、張生が自分のいる部屋の様子を描寫するのに對し、『西廂記』では窓の外にいる鶯鶯が外からみた部屋

『董西廂』から『西廂記』への繼承（土屋）

の様子を描寫している。ここでは、主體を變更し視點の移動が行われている。なお、「幽室燈清」や「疎簾風細」は、多少文字の違いはあるが、定型表現の一種である。

例 9

<p>3-1-2 【普天樂】「紅唱」……拆開封皮孜孜看。顛來倒去不害心煩。「巨怒叫」紅娘。「紅做意、云」呀、決撒了也。「唱」俺厭的挖皺了黛眉。「巨云」小賤人。不來怎麼。「唱」忽的波低垂了粉頸、靚的呵改變了朱顏。（「紅娘唱う」封を開いてしげしげと見て、くり返し讀んでは飽きもせず。「巨が怒って聲をあげる」紅娘。「紅娘思い入れ、いう」ああ、臺無しだ。「唱う」ぎゅつと擧めた黒き眉。「鶯鶯いう」ろくでなし。なにをぐずぐずしているの。「紅娘唱う」しろきうなじをつつと伏せて、わかき顔を</p>	<p>一・一-5-1 【大石調】【驀山溪】……顛來倒去、全不害心煩。（くり返し尋ねて、煩わしいとも思わず。）「普救寺の僧に鶯鶯のことを尋ねたときの張生の様子」 四・一-4-1 【仙呂調】【賞花時】把簡兒拈來擡目視。是一幅花箋寫着三五行兒字。是一首斷腸詩。低頭了、餉、讀了又尋思。（手紙を取り上げ目をあげて見れば、一枚の模様入りの箋紙に記す數行の文字、中身は一首の斷腸の詩。頭を垂れることしばし、讀んでは考える。） 四・一-5-1 【仙呂調】【繡帶兒】……低頭了、餉、把龐兒</p>
--	--

ぼつと色なす。「鶯鶯が張生からの手紙に気がつき、紅娘をなじる場面」

變了眉兒皺。(しばし頭を垂れた後、顔は一變、眉間にはしわ)「紅娘が持ってきた張生の手紙に気がついた鶯鶯の様子」

紅娘が張生からの手紙を託され、化粧臺の上に手紙を置いておく。すると、鶯鶯が手紙に気がつき、封を開けて読み始めるが、やがて怒りだし、紅娘をなじるといふ場面である。『西廂記』の「顛來倒去不害心煩」は、『董西廂』卷

一の張生が普救寺の僧から鶯鶯のことをくり返し尋ねる場面の句を用いたものである。直前に「拆開封皮孜孜看(封を開いてしげしげと見る)」とじつくりと読んでいることを示した上で、本来「何度も尋ねる」という意味であったこの句を、「何度も手紙を読む」という意味として不自然にならない工夫をしている。もとづく『董西廂』の該當箇所にも、「讀了又尋思(讀んでまた考える)」という句があり、これも踏まえているであろう。

『董西廂』では、語り手が鶯鶯の變化する様子を生き生きと描寫する。一方、『西廂記』では鶯鶯本人ではなく、

紅娘の視點からの描寫とすることで、鶯鶯の本心について觀客(または讀者)はもどかしい思いをしながら推測することになる。そこに、作者の狙い、この芝居のおもしろさがあるのではなからうか。

例10 ③表現に手を加え、場所・主體を變更

4-11【焱尾】「生唱」春意
透酥胸、春色橫眉黛。……你是必破工夫明夜早些來。(春の心はしろき胸にひろがり、春の氣配は眉にただよう。……きみ必ずお時間を作つて、明日の夜も早くいらしてください)「初めての逢瀬の後、張生が歸ろうとする鶯鶯の姿を描寫し、聲をかける場面」

七・三三【美中美】春色褪花梢、春恨侵眉黛。(春の色は花の梢に褪せ、春の恨みは眉に忍び入る)「鶯鶯が、科擧受験に旅立つた張生を戀しく想う場面」
五・一九一【仙呂調】【勝葫蘆】是必你叮嚀囑付、你那可人的姐姐。教今夜早來些。(ぜひともよくよく言い含め、お宅のあの素敵なお嬢さまに、今夜少しでも早くお越しただいてくれ)「張生が紅娘に鶯鶯との逢引を手助けするよう頼む場面」

六・一 一【仙呂調】【戀香
袞】……我而今且去、明夜來
呵。(今はともあれ行きます
が、夜にはまたまいりましょ
う。)(二度目の逢瀬の後、鶯
鶯が張生にいうせりふ)

『西廂記』卷四第一折は、鶯鶯と張生が初めて思いを遂げる場面である。【焱尾】はきぬぎぬの別れを張生が唱い、

「春意透酥胸、春色横眉黛」は、『董西廂』卷七・三三

【美中美】「春色褪花梢、春恨侵眉黛」に基づいている。

しかし、ここでも主體に注目すると、『董西廂』では、鶯

鶯が科擧受験のため旅立った張生に思いを馳せる場面で、

鶯鶯の戀しい人に容易に逢えぬ恨みが表されているが、

『西廂記』では、逢瀬の後、鶯鶯のえもいわれぬ美しさを

張生が描寫する、という内容に表現が變更されているので

ある。つづく「明夜早些來」は、『西廂記』では、張生が

鶯鶯に次の逢瀬を期待することを傳えている。これと對應

するのは、『董西廂』卷六・一の「我而今且去、明夜來

呵」であるが、より近い表現としては、『董西廂』卷五・

『董西廂』から『西廂記』への繼承(土屋)

一九一「教今夜早些來」であり、王驥徳の校注もこちらを指摘している。いずれにせよ、『董西廂』では、張生が鶯鶯との初めての逢瀬を期待する言葉であったものを、『西廂記』では、張生が次の逢瀬を期待する言葉に變えたのであろう。

例11

5-1-1 【逍遙樂】「且唱一

……看時節獨上粧樓、手捲珠簾上玉鉤、空目斷山明水秀。

(いざ景色を眺めんと獨りで登る高樓の、手ずから眞珠の

すだれを巻き上げて玉の鉤にとどめれば、視界の限りただ

むなしく清らかに澄む山と川。)(張生が旅立ったあと、

獨り寂しく待つ鶯鶯の様子を描寫)

一・二七-1【正宮】【虞美人
纏】……寂寥書寄掩重門。手捲珠簾。雙目送行雲。(寂しい書齋に門を堅く閉ざし、手にて珠の簾を巻き上げ、二つの目にて行く雲を送る。)(鶯鶯に戀焦がれる張生を描寫する場面)

七・一-3【脫布衫】……有多少女孩兒。捲珠簾騎嬌奢。從頭着看來。都盡總不知他。(あまたの若き娘らが、玉のすだれを巻き上げて、なまめかしくも華やかな姿を競うてはいるが、端から順によくよ

く見れば、いずれもあの人には及ぶべくもない。」張生が都での試験に合格し、鶯鶯を懐かしむ場面

『董西廂』卷七【脫布衫】の「捲珠簾」は、後ろの「總不知」とともに、杜牧「贈別二首」之一「春風十里揚州路、捲上珠簾總不知」を典故としている。杜牧の詩は、愛する妓女との別れを詠み、「揚州の繁華街で次々にすだれをあげて見てみても、君にまさる女性はいない」と彼女の美しさやすばらしさを稱えるが、『董西廂』はその杜牧の詩を巧みに利用して、張生が科擧に合格したものの、鶯鶯が身近にいない味気なさを述べる曲辭に變えているのである。一方、『西廂記』では、『董西廂』卷一の表現を借りつつ、さらに「捲珠簾」という表現から、李璟【浣溪沙】一「手捲眞珠上玉鈎、依前春恨鎖重樓（手ずから眞珠のすだれを巻き上げ玉の鈎にとどめれば、かつての日々と同じく春の恨みは重なるたかどのを鎖す）」という、杜牧の詩とは別の戀の愁いを詠んだ詞を用いている。この詞の文句は、まさにこの場

面における鶯鶯の心情を代辯するものであろう。

このように、『西廂記』における表現および場面の變更は、先行作品としての『董西廂』を踏まえるだけでなく、別の典據を持ち込み物語の中に有機的につないでいく、というものでもあったのである。

おわりに

最後に、ここまで述べてきたことをまとめることにしたい。

雜劇『西廂記』において、『董西廂』に基づくことが明らかなる箇所について、便宜的に三つのパターンに分け、具體例として11の例を取り上げて論じた。個々の事例について改めてくり返すことはしないが、いずれの場合でも、單純な引き寫しではないことは共通している。

では、『西廂記』の作者は、『董西廂』を下敷きにして雜劇の西廂記物語を作ろうと考えたとき、それをどのような方向で進めたのであろうか。この問題について以下の三點に分け、これまでの見てきた事例を振り返りながら考えて

みたい。

まず一點目は、形式面の相違をどのように乗り越えたかである。『董西廂』は諸宮調という語りもの一種で、語り手が物語を語っていく形式を取っている。これに對して、『西廂記』は演劇であり、俳優が登場人物に扮して演じる形で行われる。演劇の場合、登場人物の行動・心情等を直接観客（演劇脚本の場合は読み手）に知らせるときには、登場人物の誰かが唱かせりふで行わなければならない。無論、四川省の地方劇である川劇や日本の能などのように、伴唱や地謡といった、登場人物の事柄を本人に代わり歌唱することによって表現するしくみを持った演劇も存在する。實は雜劇でも、登場人物以外の人物が唱に類するものを歌唱していることがうかがえることが指摘されている。^⑥しかし、『西廂記』の作者はそういった形式を取らず、別の方法での雜劇化を考えたのである。例えば、例2では、『董西廂』が語り手によって張生の行動を述べられるのに對し、『西廂記』は紅娘が張生の行動を唱で描寫し、例9では、『董西廂』が語り手によって鶯鶯の様子を描寫するのに對し、

『董西廂』から『西廂記』への繼承（土屋）

『西廂記』では紅娘が鶯鶯の様子を唱で描寫している。これらの場面において、紅娘というのは第三者的な立場、つまり戀愛物語の主人公以外の人物であり、『董西廂』の語り手に近い位置にあると言える。語りものである『董西廂』を、雜劇という演劇スタイルに書き換えるという課題に取り組むにあたり、『西廂記』の作者は『董西廂』で語り手が描寫する箇所を、劇中人物である紅娘が唱で描寫する、つまり紅娘の視點を用いることで、克服しようとしたのではあるまいか。實際の行爲の主體が唱うことも一つの方法であり、實際そのような箇所もかなり見受けられるが、物語進行の第三者的存在である紅娘が主人公たちの様子を描寫することにより、観客や讀者が、紅娘の目を通して、主人公たちの心情を想像しながら享受することを考えたのではなからうか。

二點目に、『董西廂』の曲辭を利用する際の工夫についてである。

先に挙げた例では、曲辭をそのまま同じ場面に當てはめるのではなく、場面や主體を變更している場合が多い。場

面の變更では、登場人物が「思い悩む」場面であれば、異なる場面の同様に思い悩む表現を持ってきて、表現を多少改めて取り入れるといった例が見られた(例5・6・7・11など)。また、同様の場面で『董西廂』の表現を使う場合でも、主體を變えた上で使うという例もあった(例4・8など)。このほか、これまでの例では擧げていないが、場面・主體を變えずに、曲辭に手を入れて同内容の場面を構成するという部分もある。例えば、『西廂記』卷四第二折、紅娘が老夫人に鶯鶯と張生のことを辯明する場面は、『董西廂』卷六の該當箇所と非常に密接な關係を持つている。この場合は、西廂記の物語の中でも有名な場面であり(のちに「拷紅」として獨立して演じられるようになる)、見どころの一つであるために、多少の語句の變更は行われても、ストーリーの展開としては主體を變更する必要はあまりないと考えられたのであろう。

三點目に、登場人物の性格や役割において、『董西廂』と『西廂記』では、違いが生じていることである。特に、鶯鶯の性格の變化や、紅娘の役割の擴大については、すで

に指摘のあるところである。^⑦しかし、なぜこのような違いが生じるようになったのであろうか。無論、作者の意圖によるものであるが、ここでは曲辭の比較によって得た事柄をヒントに假説を述べたい。

西廂記物語の原型である元稹作の唐代傳奇『鶯鶯傳』と比較すれば、『董西廂』に至って紅娘の役割が大きく擴大されたことは明らかである。さらに『西廂記』においても、紅娘が歌唱する折は、主人公である張生や鶯鶯のそれよりはるかに多くなっており、紅娘の比重が高くなっていることがうかがえる。筆者が以前行った弘治本の調査^⑧によれば、卷二第三折、卷三全體、卷五第三折に紅娘の唱が集中しており、これは、作者が紅娘の役割を重視した結果とも言え、また、すでに指摘のあるように、道化の男女による掛け合の笑劇の影響も考えられるであろう。^⑨

さらにもう一つ考えられる理由としては、『董西廂』が語りものの作品であったことが關係しているのではないだろうか。先に述べたように、作者は『董西廂』の地の文にあたる部分を、『西廂記』では紅娘の唱として構成し直し

た可能性があると思われる。語りものを雑劇に作り直すとき、語り物の語り手の役目を引き継ぐ者として紅娘の役割・位置が非常に利用しやすかったのではなからうか。また、『西廂記』における鶯鶯の性格は、『董西廂』のそれより奔放でなくなっている、つまりはおとなしくなっていると言えるが、これは紅娘の役割を拡大したことに伴って、紅娘と鶯鶯との性格の違いを際立たせる必要性が生じたからではなからうか。『董西廂』の鶯鶯のように奔放な性格の性質を持ったままでは、紅娘との性格の違いが曖昧になり、その結果展開も平板なものになりかねない。また、鶯鶯の良家の令嬢としての、あるべき振る舞いや性格が重要視されたとも考えられる。

以上のように、『董西廂』と『西廂記』を比較し、『西廂記』における『董西廂』の影響を考えてきた。一般に、『西廂記』は『董西廂』に及ばないという評價がなされているが、『西廂記』は『董西廂』を利用するに際し、單純に引き寫すのではなく主體や場面を變えるなど工夫を凝らし、観客・讀者の意表を突こうとするとも考えていた。

『董西廂』から『西廂記』への繼承（土屋）

これは、『西廂記』が如何に『董西廂』を利用して雑劇作品として再構成するかということを十分に考慮して作られた作品であり、受容者が『董西廂』を知っていることが前提となつて示している。

本稿では『董西廂』との影響関係の一端を明らかにしたが、『西廂記』本文に對する検討は、まだ不十分な状態に留まつている。『西廂記』に盛り込まれた意圖をさらに明らかにするためにも、『西廂記』の本文を検討しなおし、『董西廂』以外の典據についても、詳しく調査する必要があるだろう。これについては、今後の課題としたい。

註

- ① 王驥德『新校注古本西廂記』（萬曆四十二年序）、焦循『易餘齋錄』（劇說）にもほぼ同文あり、『田中謙二著作集』第一卷（汲古書院 二〇〇〇）、『董解元西廂記諸宮調』研究（汲古書院 一九九八）の解説等。
- ② 注①前掲書『董解元西廂記諸宮調』研究「解説 五 表現の特色」二六頁、および金文京『董解元西廂記諸宮調』の構成と言語表現について（『東方學報 京都』第八五冊 二〇一〇）。
- ③ 丁福保輯『歷代詩話續編』（中華書局 一九八三）に収録。

④ 弘治本など釋義を附す版本に指摘がある。「出『烟花錄』」。

昔有一商賈極萃（粹か）美、駕舟載貨灣西河下。忽見岸高樓中有一美女。兩情相契、目視月餘、弗果所願。既而商人貨盡歸去。其女以思商之故、得疾而亡。其父焚之、獨心中一物如鐵、磨出見舟樓相對隱隱如有人形。其父收藏以爲可貨。得商復來訪女。得其由、獻金求覲、既而不覺淚下、而其心已成灰矣。（『烟花錄』を典據とする。むかし美しい商人がおり、舟に商品を積んで西河のほとりに停泊した。ふと岸邊のたかどのにいる一人の美女に目を止めた。兩人は引かれ合い、一ヵ月あまりお互いを見つめ續けたが、思いを果たせなかつた。商人は商品を買ひ盡くしたので歸つていった。その美女は商人を戀しく思う餘り、病氣になつて亡くなつた。父親が火葬すると、心臓のあたりに鐵のようなものがあつた。磨いてみると、舟とたかどのが向かい合い、かすかに人の形のようなものがあつた。父親は大切にしまつておいた。商人が再び女を訪ねてきた。その顛末を知つて、金を獻じて見せてもらつたと、思はず涙がこぼれ、その心臓は灰となつてしまつた。）」なおこれは、明・彭大翼『山堂肆考』卷九八「情契」にも見える（若干の文字の異同が見える）。

⑤ 小松謙『「現實」の浮上』「第六章 白話文學の確立」（汲古書院 二〇〇七）一四九頁に、『董西廂』について「大の男に對して、閨怨詞において楚々たる美女を形容する言葉を用いるということは、パロディ的な効果を持つのではなから

うか」と指摘されており、例6などもこれに當てはまると言えよう。

⑥ 小松謙『中國古典演劇研究』Ⅲ 演劇と他の藝能の關わり「第四章 詩讚系演劇考」（汲古書院 二〇〇一、初出『富山大學教養部紀要』第二十二卷一號「人文・社會科學篇」一九八九）では、長短句で構成される雜劇の中に、句の長さが七言や十言からなる齊言體（說唱詞話などと同系統）の部分が導入されていることが指摘されている。

⑦ 田中謙二「雜劇『西廂記』における人物性格の強調」（田中謙二著作集「第一卷 汲古書院 二〇〇〇）。

⑧ 拙論「弘治本西廂記について」（『中國文學報』第六十八冊 二〇〇四）。

⑨ 『研究』「解説 二 内容およびその文學的特性」一四一―一五頁、及び注⑤小松前掲書。

表3 『西廂記』『董西廂』 曲辭對照表

凡例・*：王驥德「新校注古本西廂記」の注で指摘されているもの
 ……：王驥德が指摘するもの以外（研究）・焦循「劇說」が指摘するもの、
 および筆者によるもの

- ①…ほぼ同じ場面に使用
 ②…曲辭は似るが、場面・主體を變更
 ③…表現に手を變え、場面・主體を變更
 ④…定型表現・語句のみの使用

1-1(1)		卷折
せりふ	弘治本曲牌	『西廂記』 曲辭
【賞花時】		『董西廂』 對應箇所
【么】	〔旦唱〕 門掩重關蕭寺中。花落水流紅。	◎一・一四二詩 黃姑上天阿母在。寂寞霜姿素運質。門掩重關蕭寺中、芳草花時不會出。①
せりふ		
【點絳脣】		
【混江龍】		
【油葫蘆】	〔生唱〕 九曲風濤何處顯。則除是此地偏。……竹索纜浮橋、水上蒼龍偃。	*一・四一【仙呂調】賞花時「黃流滾滾、時復起風濤。③ *一・四二【尾】正是黃河津要。用寸（王本作「千」）金、竹索纜着浮橋。①
【天下樂】	〔生唱〕 也曾泛浮槎到日月邊。	*一・三二【尾】 傍有江湖競相接。上連霄漢泛浮槎。①
せりふ		
【節節高】	〔生唱〕 隨喜了上方佛殿。早來到下方僧院。……〔末做見科〕 呀、正撞着五百年風流業冤。	*一・一〇一【雙調】〔文如錦〕「隨喜塔位。轉過迴廊、見箇竹簾兒（王注「兒」字無）掛起。到經藏北。法堂西（王注、この三字無）。廚房南面、鐘樓東裏。」③ *一・一〇二【尾】 白：「與那五百年疾憎的冤家、正打箇照面。」①
趑鼓】	王本では【村里	◎一・九一【商調】〔玉抱肚〕 普天下佛寺、無過普救。有三簷經閣、七層寶塔、百尺鐘樓。③

『董西廂』から『西廂記』への繼承（土屋）

1-2(2)		1-1(1)	
【醉春風】		【元和令】	【上馬嬌】
	【粉蝶兒】 「生唱」與我那可憎才居止處門兒相向。雖不能勾竊玉偷香。且將這盼行雲眼睛兒打當。	【後庭花】 「生唱」投至到龍門兒前面。剛那了一步遠。剛剛的打箇照面。	【勝葫蘆】 「生唱」則見他宮樣眉兒新月偃。
	【賺煞】 せりふ	【柳葉兒】	【幺】
		【寄生草】 「生唱」你道是河中開府相公家、我道是海南水月觀音現。	
			【眉兒山勢遠】 ③④
			【風吹荷葉】 生得於中堪羨。露着龐兒一半。宮樣
			【尾】窮綴作、腌對付。怕曲兒捻到風流處。教普天下顛不刺的浪兒每許。④
			【醉奚婆】 儘人顧盼。手把花枝撚。③④
			【尾】窮綴作、腌對付。怕曲兒捻到風流處。教普天下顛不刺的浪兒每許。④
			【尾】白：「與那五百年疾憎的冤家、正打箇照面。」①
			【尾】「天天悶得人來殺。」(王注は自説の根據に引くか)
			【尾】我甚恰纔見水月觀音現。①
			【尾】這一雙鶻鴿眼。須看了可憎底千萬。兀底般媚臉兒不會見。④
			【正宮】 【虞美人纏】 手捲珠簾。雙目送行雲。③

1-2(2)

【迎仙客】	「生唱」頭直上只少圓光。却便似捏塑來的僧伽像。	*一・三二二【鬪鶴鴉】只少箇圓光。便似聖僧模樣。「研究」一〇八頁②
せりふ		
【石榴花】	「生唱」大師一問行藏。小生仔細訴衷腸。	◎一・一五一【大石調】【驀山溪】法聰頻勸、道先輩休胡想。一一話行藏。不是貧僧說謊。適來佳麗是桂相國的女孩兒、十六七小字喚鶯鶯。白甚觀音像。①④
【鬪鶴鴉】		◎【中呂調】【古輪臺】那紅娘對生一一話行藏。④
せりふ	「末云」逕裏。有白銀一兩、……但充講下一茶耳。	◎一・一八二【吳音子】後の生のせりふ「有白金五十星。聊充講下一茶之費。」①
【上小樓】		
【幺】		
せりふ		
【脫布衫】		
【小梁州】	「生唱」可喜娘的龐兒淺淡粧。穿一套縞素衣裳。胡伶六老不尋常。偷睛望。眼挫裏抹張郎。	*一・三三三【青山口】着一套兒白衣（王作「穿一套兒白衣裳」、直許多韻相。②） *一・一二一【中呂調】【香風合纏令】那鶻鶻淥老兒、難道不清雅。④
【幺】		
せりふ		

1-3(3)		1-2(2)											
【鬪鶴鴉】	せりふ	【尾】	【二煞】	【三煞】	【四煞】	【五煞】	【耍孩兒】	【哨遍】	せりふ	【四邊靜】	せりふ	【朝天子】	【快活三】
〔生唱〕 玉宇無塵、銀河瀉影。	〔詩曰〕 閑尋丈室高僧語、悶對西廂皓月吟。							〔生唱〕 把一天愁都撮在眉尖上。	〔紅怒云〕 俺老夫人治家嚴肅、有冰霜之操。				〔生唱〕 莫不是演撒你箇老潔郎。既不沙却怎賒 趁着你頭上放毫光。打扮的特來晃。
良夜靜復靜、天上美人來不來。② ↓ ④ 一【端正好】後に後半	① ◎ 一・一九 二【尾】「……閑尋丈室高僧語。悶對西廂皓月吟。」							在眉尖上。② ④	* 三・二四 一【中呂調】 【棹孤舟纒令】百千般悶和愁、盡總撮				* 一・三二 四【雪裏梅】 諸僧與看人驚晃。瞥見一齊都望。③ ②

【紫花兒序】	「生唱」一更之後、萬籟無聲。直至鶯庭。	*一・二〇一【中呂調】【鶴打兔】對碧天晴。清夜月如懸鏡。張生徐步、漸至鶯庭。③④
【金蕉葉】	「生唱」猛聽得角門兒呀的一聲。風過處花香細生。「足店」着脚尖兒仔細定睛。比我那初見時龐兒越整。	*一・二〇一【中呂調】【鶴打兔】……聽得啞地門開、襲襲香至、瞥見鶯鶯。①④ ◎一・二七四【尾】の後：生從見了如花。煩惱處治不下。本待欲睡。忽聽得籠門兒低啞。 *四・八二【尾】朱扉半開啞地響。風過處惟聞蘭馨香。雲雨無緣空斷腸。 *一・二二一【仙呂調】【繡帶兒】映花陰、靠小欄。照人無奈、月色十分滿。眼睛兒不轉。仔細把鶯鶯偷看。
【調笑令】	「生唱」我這里甫能。見娉婷。比着那月殿嫦娥也不恁般撐。遮遮掩掩穿芳徑。粉應來小腳兒難行。可喜娘的臉兒百媚生。兀的不引了人魂靈。	*一・二一二【尾】遮遮掩掩衫兒窄。④ *一・二〇二【尾】臉兒靨色百媚生。出得門兒來慢慢地行。便是月殿裏嫦娥也沒恁地撐。①④
せりふ	「生唱」別團團明月如懸鏡。	*一・二〇一【中呂調】【鶴打兔】對碧天晴。清夜月如懸鏡。①④ *一・二一二【尾】覷着別團團的明月伽伽地拜。①④
せりふ十詩	〔末〕念詩曰「月色溶溶夜、花陰寂寂春。如何臨皓魄、不見月中人。」	◎一・一九二【尾】閑尋丈室高僧語。悶對西廂皓月吟。是夜月色如畫。生至鶯庭側近。口占二十字小詩一絕。其詩曰。月色溶溶夜、花陰寂寂春。如何臨皓魄、不見月中人。詩罷。邊庭徐步。「研究」八三頁①

1-3(3)		
【尾】	<p>〔生唱〕有一日柳遮花映。霧障雲屏。夜闌人靜。海誓山盟。</p>	<p>◎一·二一 2 【尾】遮遮掩掩衫兒窄。那些嬾嬾婷婷體態。覷着別團圓的明月伽伽地拜。不知心事在誰邊。整頓衣裳拜明月。佳人對月。依君瑞韻亦口占一絕。其詩曰。 蘭闌久寂寞、無事度芳春。料得行吟者、應隣長嘆人。 生聞之驚喜。『研究』一八七頁①</p>
【么】	<p>〔生唱〕窗兒外浙零零的風兒透疎櫺。忒楞楞的紙條兒鳴。枕頭兒上孤另。被窩兒里寂靜。你便是鐵石人、鐵石人也動情。</p>	<p>*一·二六 2 〔攪箏琶〕那堪更小字兒得恹人意。蟲蟻兒裏。多情的鶯兒第一。偏稱縷金衣。</p>
【拙魯速】	<p>〔生唱〕白日淒涼枉耽病。今夜把相思再整。</p>	<p>*一·三〇 2 【尾】儂或明日見他時分。把可憎的媚臉兒飽看了一頓。便做受了這悽惶也正本。</p>
【綿搭絮】		
【東原樂】		
【絳絲娘】		
【么】		
【麻郎兒】		
【聖藥王】	<p>〔生唱〕小名兒不枉了喚做鶯鶯。</p>	
【禿厮兒】		
せりふ十詩	<p>〔旦和詩曰〕闌(蘭)闌久寂寞、無事度芳春。料得行吟者、應隣長嘆人。</p>	

せりふ		
【新水令】		
【駐馬聽】		
【沈醉東風】	<p>〔生唱〕爲曾祖父先靈、禮佛法僧三寶。焚名香暗中禱告。則願得紅娘休劣、夫人休焦、犬兒休惡。</p>	<p>◎一・三四一【般涉調】【哨遍纏令】……來僧早躬身合掌、稽首皈依佛法僧三寶。『研究』一一二頁① ◎四・一八一【中呂調】【碧牡丹】……怕的是月兒明、夫人劣、狗兒惡。①</p>
【鴈兒落】		
【得勝令】		
【喬牌兒】	<p>〔生唱〕大師年紀老。法座上也凝眺。舉名的班首癡呆傍。</p>	<p>*一・三二四【雪裏梅】諸僧與看人驚晃。瞥見一齊都望。住了念經、罷了隨喜、忘了上香。③</p>
【甜水令】	<p>〔生唱〕老的小的、村的俏的、沒顛沒倒。勝似鬧元宵。</p>	<p>*一・三二四【雪裏梅】：選甚士農工商。一地裏鬧鬧攘攘。折莫老的小的、俏的村的、滿壇裏熱荒。①</p>
【折桂令】	<p>〔生唱〕着小生迷留沒亂、心癢難撓。……添香的行者心焦。燭影風搖。香霧雲飄。貪看鴛鴦、燭滅香消。</p>	<p>*三・一九一【商調】【玉抱肚】沒留沒亂、不言不語。儘夫人問當、夫人說話、不應一句。酒來後滿盞家沒命飲、面磨羅地甚情緒。喫着下酒、沒滋味、似泥土。白心腹。鴛鴦指望同鴛侶。誰知道打脊老嫗許不與。『研究』一九九頁④ *一・三二五【尾】添香侍者似風狂。執磬的頭陀呆了半餉。作法的闍黎神魂蕩颺。不顧那本師和尚。聒起那法堂。怎遮當。貪看鴛鴦鬧了道場。『研究』一〇八頁③ ◎七・一〇三【轉青山】鴛鴦儘勸、全不領略。迷留悶亂沒處着。『研究』三七五頁④</p>

2-1(5前)

【天下樂】	〔巨唱〕紅娘呵、我則索搭伏定鮫綃枕頭兒上盹。	◎一・二七四【尾】待登臨又不快兩行又悶。坐地又昏沈睡不穩。子倚着箇鮫綃枕頭兒盹。②
【那吒令】		
【鵲踏枝】		
【寄生草】		
【六么序】	〔巨唱〕聽說罷魂離殼、見放着禍滅身。……孤孀子母無投奔。赤緊的先亡過了有福之人。耳邊廂金鼓連天振。征雲冉冉、土雨紛紛。	*二・一八一【道宮】【解紅】鶯聞人道。森森地說得魂離殼。……孤孀子母、沒處投告。① *二・一七一【仙呂調】【別銀燈】塵蔽了青天、旗遮了紅日、滿空紛紛土雨。鳴金擊鼓。①
【么】	〔巨唱〕更將那天宮般蓋造焚燒盡。	*二・一七三【尾】寺牆兒便是純鋼裏。更一箇時辰打不破。屯着山門便點火。③
せりふ		
【后庭花】	〔巨唱〕第一來免摧殘老太君。第二來免堂殿作灰塵。第三來諸僧無事得安存。第四來先君靈柩穩。第五來歡郎雖是未成人。	*二・一八二【道宮】【解紅】……若惜奴一箇、有大禍三條。【尾】第一我母親難再保。第二諸僧都索命天。第三把兜率般的伽藍枉火內燒。③
【柳葉兒】		
【青哥兒】		
せりふ		
【賺煞】		
せりふ		

2-2(5 後)		
せりふ	【正宮端正好】 〔惠唱〕不念法華經、不禮梁皇懺。	*二・四1【仙呂調】【繡帶兒】不會看經、不會禮懺。不清不淨、只有天來大膽。③
【滾綉毬】	〔惠唱〕我將這五千人做一頓饅頭餡。	*二・四2【尾】開門但助我一聲喊。戒刀舉把群賊來斬。送齋時做一頓饅頭餡。①
【倘秀才】		
【滾繡毬】		
【白鶴子】	〔惠唱〕着幾箇小沙彌把幢幡寶蓋、壯行者將桿棒鑊叉擔。	*二・五1【雙調】【文如錦】細端詳。見法聽生得搗搜相。……或拿着切菜刀、幹麵杖。把法鼓播得嗎、打得齋鐘響。着綾幡做甲、把鉢盂做頭盔戴着頂上。③
【二】		
【三】		
【四】		
【五】		
【收尾】	〔惠唱〕仗佛力納一聲喊。	*二・四2【尾】開門但助我一聲喊。④
【賞花時】		
【幺】		
せりふ	〔將軍望蒲關起發曰〕馬離普救敲金鐘、人望蒲關唱凱歌。	◎三・五1 馬離普救搖金勒、人望蒲關和凱歌。①

									せりふ
									【中呂粉蝶兒】
									【醉春風】
									【脫布衫】
									【小梁州】
									【幺】
									【上小樓】
									【幺】
									【滿庭芳】
									【快活三】
									【朝天子】
									【四邊靜】
									【耍孩兒】
									【四煞】

2-4(7)					2-3(6)							
【得勝令】	【鴈兒落】	【慶宣和】	【攪箏琶】	【喬木查】	【么】	【新水令】	【雙調五供養】	せりふ	【收尾】	【二幅】	【三煞】	
合。 妹拜哥哥。……急攘攘因何。挖搭地把雙眉鎖納						驚覺人呵。猶壓着繡衾臥。	粉香浮汚。將指尖兒來輕輕的貼了鈿窩。若不是 粉香浮汚。將指尖兒來輕輕的貼了鈿窩。若不是 粉香浮汚。將指尖兒來輕輕的貼了鈿窩。若不是	〔旦唱〕篆煙微、花香細、散滿東風簾幙。	〔生曰〕……不知性命如何。且看下回分解。			
③ ④	*三·一八二 婆瞞過我。③					背面相思對面羞。	落花熏砌、香滿東風簾幕。①	*四·一八一 〔中呂調〕〔碧牡丹〕夜深更漏悄。張生赴鶯期約。				
	*三·一八二 【三煞】是俺失所算、謾摧挫。被這箇積世的老虔					人無語但回眸。料得娘行不自由。眉上新愁壓舊愁。天天悶得人						
	【柘枝令】頓不開眉尖上的悶鎖。解不開心頭愁結。					來呵。把深恩都變做仇。比及相面待追依、見了依前還又休。是						

3-1(9)			2-5(8)											
せりふ	【賞花時】	せりふ	【絳絲娘煞尾】	【尾】	【拙魯速】	【綿搭絮】	【東原樂】	【絳絲娘】	【幺】	【麻郎兒】	張生の琴の歌	【聖藥王】	【禿厮兒】	【調笑令】
						〔旦唱〕疎簾風細、幽室燈清。都則是一層兒紅紙、幾桃兒疎櫺、兀的不是隔着雲山幾萬重。				〔生唱〕知音者芳心白條、感懷者斷腸悲痛。	有美人兮、見之不忘。一日不見兮、思之如狂。鳳飛翱翔兮、四海求凰。無奈佳人兮、不在東牆。張琴代語兮、聊寫微腸。何時見許兮、慰我徬徨。願言配德兮、攜手相將。不得于飛兮、使我淪亡。	〔旦唱〕嬌鸞雛鳳失雌雄。		
						*四・三一【中呂調】【滿庭霜】幽室燈清、疎簾風細、獸爐香蕪龍涎。抱琴拂拭、清興已飄然。③				*四・一【雙調】【文如錦】教知音的暗許、感懷者自痛。④	◎四・六二【尾】有美人兮見之不忘。一日不見兮思之如狂。鳳飛翱翔兮四海求凰。無奈佳人兮不在東牆。張絃代語兮聊寫微茫。何時見許兮慰我徬徨。願言配德兮攜手相將。不得于飛兮使我淪亡。①	*五・二二一【大石調】【洞仙歌】恰似嬌鸞配雛鳳。④ *五・二三一【中呂調】【千秋節】雛鸞嬌鳳乍相見。④		

【點絳脣】		
【混江龍】		
【油葫蘆】		
【天下樂】		
【村里逐鼓】	<p>〔紅唱〕 我將這紙窗兒濕破、悄聲兒窺視。</p>	<p>*四・一〇二【雙聲疊韻】把窗兒紙、微潤破。見君瑞披衣坐。 ①④</p>
【元和令】	<p>〔紅唱〕 金釵敲門扇兒。〔末問〕 是誰。(紅唱) 我是箇散相思五瘟使。俺小姐想着風清月朗夜深時。使紅娘來探爾。〔末云〕 既然小娘子來、必定有言語。〔唱〕 俺小姐至今胭粉未曾施。念到有一千番張殿試。</p>	<p>④八・三一【大石調】【玉翼蟬】把窗問紙、微潤開、君瑞偷睛覷。①④</p>
【上馬嬌】		<p>*四・一一一【仙呂調】【勝葫蘆】手取金釵把門打。君瑞問是誰家。是紅娘囉待與先生相見咱。①</p>
【勝葫蘆】		<p>*四・一四一【仙呂調】【賞花時】過雨櫻桃血滿枝。弄色奇花紅間紫。清曉雨晴時。起來梳裹、脂粉未曾施。①</p>
【幺】		
せりふ十詩 (張生書簡)	<p>〔詩曰〕 相思恨轉添、謾把瑤琴弄。樂事又逢春、芳心爾亦動。此情不可違、虛譽何須奉。莫負月華明、且憐花影重。</p>	<p>◎四・一四二相思恨轉深。謾托鳴琴弄。樂事又逢春。花心應已動。幽情不可違。虛譽何須奉。莫惡月華明。且憐花影重。①</p>
【后庭花】	<p>〔紅唱〕 我則道拂花牋打稿兒、元來他染霜毫不勾思。先寫下幾句寒溫序、後題着五言八句詩。不移時把花牋錦字。……</p>	<p>*四・一三【雙調】【御街行】……拂拭錦箋一紙。筆頭灑落相思淚、盡寫心間事。也不打草不勾思。先序幾句俺傳示。一揮揮就一篇詩。筆翰與羲之無一。……『研究』二三七頁①</p>

3-2(10)					3-1(9)						
【脫布衫】	【四邊靜】	【朝天子】	【快活三】	【普天樂】	【醉春風】	【粉蝶兒】	せりふ	せりふ	【煞尾】	【寄生草】	【青歌兒】
				<p>〔紅唱〕顛來倒去不害心煩。……俺厭的挖皺了黛眉。……忽的波低垂了粉頸，氳的呵改變了朱顏。</p>					<p>〔紅唱〕沈約病多般、宋玉愁無二。</p>		<p>〔紅唱〕顛倒寫鴛鴦鴛鴦兩字。</p>
			<p>◎四·一五1【仙呂調】【繡帶兒】……低頭了一餉、把龐兒變了眉兒皺。③</p>	<p>◎一·一五1【大石調】【驀山溪】……顛來倒去、全不害心煩、</p> <p>④</p> <p>*四·一四1【仙呂調】【賞花時】把簡兒拈來擡目視。是一幅花箋寫着三五行兒字。是一首斷腸詩。低頭了一餉、讀了又尋思。</p> <p>③</p>				<p>*五·二【中呂調】【踏莎行】……沈約一般。潘郎無二。算來都為相思事。鴛鴦你還知道我相思。甘心為你相思死。③④</p>		<p>*四·一三【雙調】【御街行】……須臾和淚一齊封了上面、顛倒寫一對鴛鴦字。『研究』一三七頁①</p>	

【小梁州】		
【幺】		
せりふ		
【石榴花】		
【鬪鶻鴉】		
【上小樓】	<p>〔紅唱〕……若不是覷面顏、厮顧盼。擔饒輕慢。</p>	<p>*四・二〇一【雙調】【攪箏琶】紅娘曰。君瑞好乖劣。半夜三更、來人家院舍。明日告州衙、教賢分別。官人每更做擔饒你、須監守得你幾夜。④</p>
【幺】		
【滿庭芳】	<p>〔紅唱〕直待我拄着拐幫閑鑽懶、縫合唇送暖偷寒。</p>	<p>◎四・一五二【尾】如還沒事書房裏走。更着閑言把我挑鬪。我打折你大腿縫合你口。④ *四・一六二【尾】紅娘聞語道休針喇。放一四不識娘羞。待要打折我大腿縫合我口。④</p>
せりふ十詩	<p>〔末云〕……我今夜花園里來、和他哩、也波哩、也囉哩。……〔末云〕是四句詩。待月西廂下、迎風戶半開。隔牆花影動、疑是玉人來。</p>	<p>◎五・一七二の七言八句【喬合笙】休將閑事苦縈懷。和。哩哩囉哩哩囉哩來也。② ◎四・一六二「待月西廂下、迎風戶半開。隔牆花影動、疑是玉人來。」①</p>
【耍孩兒】		
【四煞】		
【三煞】		
【二煞】		

3-4(12)			3-3(11)		
【小桃紅】	【調笑令】 岩鬼病侵。	【天淨沙】	せりふ	【紫花兒序】 〔紅說旦〕把似你休倚着籠門兒待月、	【鬪鶴鴉】 〔紅說旦〕折倒得鬢似愁潘、腰如病沈。
	〔生對紅說〕我這里自審。這病爲邪淫。屍骨岩		〔末云〕……小娘子、閻王殿前、少不得你做箇干連人。		
	◎五・一五1【木蘭花】……讀罷稿幾回喝采。十分來的鬼病。九分來痊差。紅娘勸道。且寧耐。有何喜事恁大驚小怪。『研究』二八〇頁④		◎五・六1【南呂調】〔一枝花〕……我見得十分難做人。待死後通些靈聖。閻王問你甚死。我說實情。從始末根由。說得須教信。少後三二日。多不過十朝。須要你鴛鴦償命。①		◎五・二1【中呂調】〔踏莎行〕……沈約一般。潘郎無二。算來都爲相思事。鴛鴦你還知道我相思。甘心爲你相思死。③④
	◎五・六2【尾】待閻王道俺無憑准。抵死謾生斷不定。也不共他爭。我專指着伊家做照證。①		*五・二〇1【仙呂調】〔賞花時〕倚定門兒手托腮。悶答孩地愁滿懷。④		*四・二四3【墻頭花】情詩兒自今休吟、簡帖兒從今莫寫。① *三・一八1【南呂宮】〔瑤臺月〕尙古子不曾梳裹。④
			【離亭宴帶歇拍】 〔紅唱〕淫詞兒早則休、簡帖兒從今罷。尙古自參不透風流詞法。	せりふ	【得勝令】
			せりふ	【雁兒落】	せりふ

4-1(13)	3-4(12)					
<p>せりふ十詩</p> <p>【端正好】</p> <p>せりふ</p> <p>【絡絲娘煞尾】</p> <p>【收尾】</p> <p>【幺】</p>					<p>【綿搭絮】</p> <p>【東原樂】</p> <p>【聖藥王】</p>	<p>【鬼三臺】</p> <p>せりふ</p>
<p>〔生念〕人間良夜靜復靜、天上美人來不來。</p>				<p>〔紅說旦〕他眉黛遠山鋪翠、眼橫秋水無塵、體若凝酥、腰如韜柳。</p>		<p>〔末念云〕休將閑事苦縈懷、取次摧殘天賦才。不意當時完妾行、豈防今日作君災。仰徒厚德難從禮、謹奉新詩可當媒。寄語高堂（唐）休詠賦、今宵端的雨雲來。</p>
<p>◎五・一九二【尾】後是夜玉宇無塵、銀河瀉露。……人間良夜靜復靜、天上美人來不來。（↓一三【鬪鶻鴉】に前半）</p>			<p>*一・一一四【尾】這一雙鶻鴉眼。須看了可憎底千萬。兀底般媚臉兒不會見。手撚粉香春睡足。倚門立地怨東風。髻綰雙鬟。釵簪金鳳。眉彎遠山不翠。眼橫秋水無光。體若凝酥。腰如韜柳。指猶春筍纖長。脚似金蓮穩小。②</p>			<p>◎五・一七二【喬合笙】休將閑事苦縈懷。和。哩哩囉哩哩哩哩來也。取次摧殘天賦才。和。不意當初完妾命。和。豈防今日作君災。和。仰酬厚德難從禮。和。謹奉新詩可當媒。和。寄語高唐休詠賦。和。今宵端的雨雲來。和。①</p>

4-1(13)

【點絳脣】	<p>〔生唱〕月移花影、疑是玉人來。意懸懸業眼。急穰穰情懷。身心一片、無處安排。則索呆答孩倚定門兒待。越越的青鸞信杳、黃犬音乖。</p>	<p>◎四・四一【中呂調】粉蝶兒 徘徊月移花影。① *六・二七二【石榴花】爭奈按不下九曲回腸、合不定一雙業眼。 *七・三一【道宮】憑欄人纏令……勞勞攘攘。身心一片。沒處安排。 *五・二〇一【仙呂調】賞花時 倚定門兒手托腮。悶答孩地愁滿懷。不免入書齋。</p>
【油葫蘆】	<p>〔生唱〕我則索倚定門兒手托腮。</p>	<p>*五・二〇一【仙呂調】賞花時 倚定門兒手托腮。①</p>
【天下樂】	<p>〔生唱〕我則索倚定門兒手托腮。</p>	<p>*五・二〇一【仙呂調】賞花時 倚定門兒手托腮。①</p>
【那吒令】	<p>〔生唱〕我則索倚定門兒手托腮。</p>	<p>*五・二〇一【仙呂調】賞花時 倚定門兒手托腮。①</p>
【鵲踏枝】	<p>〔生唱〕端的是太平車約有十餘載。</p>	<p>*七・三一【道宮】憑欄人纏令……欲問俺心頭問答孩。太平車兒難載。④</p>
【寄生草】	<p>〔生唱〕端的是太平車約有十餘載。</p>	<p>*七・三一【道宮】憑欄人纏令……欲問俺心頭問答孩。太平車兒難載。④</p>
【村里迓鼓】	<p>〔生唱〕着小姐這般用心、不才張珙、合當脆拜。小生無宋玉般容、潘安般貌、子建般才。</p>	<p>*五・二八三【甘草子】聽說破。聽說破。張生低告道、姐姐言語錯。休恁廝埋怨、休恁廝奚落。張榭殊無潘沈才、輒把梅厚點污。負心的神天放不過。休廝奴哥。③</p>
【元和令】	<p>〔生唱〕繡鞋兒剛半拆。柳腰兒勾一搨、</p>	<p>*一・二二一【仙呂調】整花冠 穿對兒曲彎彎的半拆來大弓鞋。③</p>
【上馬嬌】	<p>我將這鈕釦兒鬆、縷帶兒解。蘭麝散幽齋。不良會把人禁害。哈、怎不肯回過臉兒來。</p>	<p>*六・四一【中呂調】牧羊關 好教我禁不過、這不良的下賤人。④</p>
【勝葫蘆】	<p>我將這鈕釦兒鬆、縷帶兒解。蘭麝散幽齋。不良會把人禁害。哈、怎不肯回過臉兒來。</p>	<p>*六・四一【中呂調】牧羊關 好教我禁不過、這不良的下賤人。④</p>

4-2(14)		4-1(13)	
【金蕉葉】	<p>〔紅唱〕誰着你迤逗的胡行亂走。若問着此一節呵如何訴休。</p>	【後庭花】	<p>〔生唱〕但蘸着些兒麻上來。魚水得和諧。嫩蕊嬌香蝶恣採。半推半就、又驚又愛。檀口搵香腮。</p>
【紫花兒序】	<p>〔紅唱〕俺小姐這些時春山低翠、秋水凝眸。別樣的都休。試把你裙帶兒拴、紐門兒扣。比着你舊時肥瘦。出落得精神、別樣的風流。</p>	【寄生草】	<p>〔生唱〕成就了今宵今宵歡愛。魂飛在九霄九霄雲外。……只疑是昨夜夢中來。愁無奈。</p>
【越調鬪鶴鴉】	<p>〔紅唱〕老夫人心教多、情性攆。</p>	【煞尾】	<p>〔生唱〕春意透酥胸、春色橫眉黛。……你是必破工夫明夜早些來。</p>
④	<p>*六·四一【中呂調】【牧羊關】迤逗得鶯鶯去、推探張生病。</p>	①	<p>*五·二八四【尾】鶯鶯色膽些來大、不慣與張生做快活、那孩兒怕子箇、怯子箇、閃子箇。③</p>
◎四·一五一【仙呂調】【繡帶兒】孩兒多應沒訴休。④『研究』二三八頁	<p>*三·一四一【黃鍾調】【待香金童】不隄防夫人情性攆。①</p> <p>*六·二一【雙調】【倬倬威】陡恁地精神偏出跳、轉添嬌、渾不似舊時了。舊日做下的衣服件件小、眼護眉低胸乳高。①</p>	①	<p>*七·三三【美中美】春色褪花梢、春恨侵眉黛。</p> <p>*五·一九一【仙呂調】【勝葫蘆】「是必你叮嚀囑付。你那可人的姐姐。教今夜早來些。」王注：俗本作「明夜」非。（諸本のほとんどが「明夜」に作る。）①</p> <p>*五·二五一【羽調】【混江龍】①起來搔首。數竿紅日上簾櫳。猶疑慮。實曾相見。是夢裏相逢。却有印臂的殘紅香馥馥。恨人的粉汗尙融融。鴛衾底。尙有三點。兩點兒紅。③</p>

4-2(14)

【調笑令】	〔紅唱〕你繡幃裏效綉繆。倒鳳顛鸞百事有。	*四・一二一【中呂調】【古輪臺】琴感其心、見得十分能勾。教俺得來、痛惜輕憐、繡幃深處效綉繆。
【鬼三臺】	〔紅唱〕他兩箇經今月餘只是一處宿。何須你一一問緣由。	*六・五一【仙呂調】【六么令】……一對兒佳人才子、年紀又敵頭。經今半載、雙雙每夜書幃裏宿、已恁地出乖弄醜、潑水再難收。夫人休出口、怕旁人知道、到頭贏得自家羞。
【聖藥王】	〔紅唱〕他每不識憂。不識愁。一雙心意兩相投。夫人得好休。便好休。這其間何必苦追求。常言道女大不中留。	*六・五二【尾】一雙兒心意兩相投、夫人白甚閑疙皺、休疙皺、常言道女大不中留。
せりふ	〔紅唱〕秀才是文章魁首。姐姐是仕女班頭。	*六・五一【仙呂調】【六么令】夫人息怒、聽妾話踪由、不須堂上、高聲揮喝罵無休。君瑞又多才多藝、咱姐姐又風流。
【幺】	〔紅唱〕便是與崔相國出乖弄醜。	*六・五一【仙呂調】【六么令】……夫人休出口、怕旁人知道、到頭贏得自家羞。(王注はここを擧げるが、あまり一致しない。)
【絳絲娘】	〔紅唱〕便是與崔相國出乖弄醜。	①◎六・五一【仙呂調】【六么令】……便是與崔相國出乖弄醜。
せりふ		
【小桃紅】		
せりふ		

4-3(15)										4-2(14)				
【幺】	【滿庭芳】	【幺】	【上小樓】	【幺】	【小梁州】	【脫布衫】	せりふ	【叨叨令】	【滾繡毬】	せりふ	【端正好】	【收尾】	【東原樂】	【小桃紅】
								〔旦唱〕從今後衫兒袖兒、搵濕做重重疊疊淚。			〔旦念〕悲歡聚散一杯酒、南北東西萬里程。 〔旦唱〕碧雲天、黃花地。西風緊、北鴈南飛。 曉來誰染霜林醉。總是離人淚。			〔紅說旦〕你休愁。何須約定通媒媾。
								*六・一四1【大石調】【玉翼蟬】衫袖上盈盈、搵淚不絕。『研究』三二八頁			*六・一三1末尾 悲歡離合一尊酒、南北東西十里程。 *六・一四2【尾】莫道男兒心如鐵。君不見滿川紅葉。盡是離人眼中血。			*三・一四1【黃鍾調】【侍香金童】不須把定、不在通媒媾。 (王本作「不用通媒媾」)③風光好二折【牧羊關】

【快活三】	<p>〔巨唱〕 將來的酒共食。嘗着似土和泥。假若便是土和泥、也有些土氣息泥滋味。</p>	<p>*三・一九一【商調】〔玉抱肚〕 沒留沒亂、不言不語。儘夫人問當、夫人說話、不應一句。酒來後、滿盞家沒命飲、面磨羅地甚情緒。喫着下酒、沒滋味、似泥土。自心窩腹。鶯鶯指望同鴛侶。誰知道、打脊老嫗許不與。</p>
【朝天子】	<p>〔巨唱〕 煖溶溶玉盃。白冷冷似水、多半是相思淚。眼面前茶飯、怕不待要喫。恨塞滿愁腸胃。蝸角虛名、蠅頭微利。拆鴛鴦在兩下里。一箇這壁。一箇那壁。一遞一聲長吁氣。</p>	<p>◎六・一六1【仙呂調】〔戀香衾〕……君瑞啼痕污了衫袖、鶯鶯粉淚盈腮。一箇止不定長吁、一箇頓不開眉黛。①④ *六・一七2【尾】 滿斟離杯長出口兒氣。比及道得箇我兒將息。一盞酒裏白冷冷的滴回半盞來淚。『研究』三三四頁①</p>
【四邊靜】	<p>〔生唱（旦とするテキストもあり）〕 霎時間杯盤狼籍。車兒投東、馬兒向西。兩意徘徊。落日山橫翠。知他今宵宿在那里。有夢也難尋覓。</p>	<p>*六・一七1【大石調】〔鶯山溪〕 離筵已散、再留戀應無計。煩惱的是鶯鶯、受苦的是清河君瑞。頭西下控着馬、東向馱坐車兒。辭了法聰、別了夫人、把樽俎收拾起。『研究』三三三頁③④ *六・一八2【尾】 馬兒登程、坐車兒歸舍、馬兒往西行坐車兒往東拽。『研究』三三五頁③④</p>
せりふ十詩×2	<p>〔生唱（旦とするテキストもあり）〕 怕勞東去燕西飛。未登程先問歸期。……未飲心先醉。眼中流血、心內成灰。</p>	<p>*六・一五4【錯煞】 我郎休怪強牽衣、問你西行幾日歸。③ *六・一七1【大石調】〔鶯山溪〕……臨上馬、還把征鞍倚。低語使紅娘、更告一盞以爲別禮。鶯鶯君瑞、彼此不勝愁、廝覩者、總無言、未飲心先醉。①</p>
【耍孩兒】	<p>〔巨囑生〕 荒村雨露宜眠早、野店風霜要起遲。</p>	<p>*六・一五4【錯煞】 我郎休怪強牽衣、問你西行幾日歸。着路裏小心呵、且須在意。省可裏晚眠早起、冷茶飯莫吃、好將息、我倚着門兒專望你。『研究』三三二頁 焦循「劇說」③④</p>
【五煞】	<p>〔巨囑生〕 荒村雨露宜眠早、野店風霜要起遲。</p>	<p>*六・一五4【錯煞】 我郎休怪強牽衣、問你西行幾日歸。着路裏小心呵、且須在意。省可裏晚眠早起、冷茶飯莫吃、好將息、我倚着門兒專望你。『研究』三三二頁 焦循「劇說」③④</p>

4-4(16)				4-3(15)			
【喬木查】	【落梅風】	【步步嬌】	【新水令】	【收尾】	【一煞】	【二煞】	【三煞】
			〔生唱〕望蒲東蕭寺暮雲遮。慘離情半林黃葉。馬遲人意懶、風急雁行斜。離恨重疊。破題兒第一夜。	〔旦唱〕四圍山色中、一鞭殘照裏。遍人間煩惱填胸臆。量這些大小車兒如何載得起。		〔旦唱〕你休憂文齊福不齊。我則怕你停妻再娶妻。你休要一春魚鴈無消息。……	〔旦唱〕留戀你別無意。見據鞍上馬、悶不住泪眼愁眉。
			*六·二一 2 【蠻牌兒】……料得我兒今夜裏、那一和煩惱唾嚙。不恨咱夫妻今日別。動是經年、少是半載、恰第一夜。③	◎六·一九 4 【尾】驢鞭半裊、吟肩雙聳。休問離愁輕重。向箇馬兒上駝也駝不動。(焦循【劇說】) *六·二六 1 【黃鍾宮】【侍香金童纏令】大小身心、時下打疊不過。④		*六·一五 2 【鬪鶻鷄】囑付情郎。若到帝里、帝里酒釀花穠、萬般景媚、休取次共別人、便學連理。少飲酒、省遊戲、記取奴言語、必登高弟。③	*六·一七 1 【大石調】【嵩山溪】離筵已散、再留戀應無計。煩惱的是鶯鶯、受苦的是清河君瑞。③
			せりふ				【四煞】

【攪爭筈】	〔巨唱〕想着他臨上馬痛傷嗟。哭得我也似癡呆。不是我心邪。自別離已後、到日初斜。愁得來陡峻、瘦得來啾嘍。	*六・二一 1 【越調】【廳前柳纏令】……倚定筒枕頭兒越越的哭、哭得悄似癡呆。① *六・二一 2 【蠻牌兒】……料得我兒今夜裏、那一和煩惱啾嘍。③
【錦上花】	〔巨唱〕有限姻緣、方纔寧貼。無奈功名、使人離缺。	*六・二一 2 【蠻牌兒】活得正美滿、被功名使人離缺。①
【清江引】	〔巨唱〕呆答孩店房兒里沒話說、悶對如年夜。暮雨催寒蛩、曉風吹殘月。今宵酒醒何處也。	*四・二四 1 【般涉調】【蘇幕遮】那張生心不悅。過得牆來、悶悶歸書舍。壁上銀釵半明滅。牀上無眠、愁對如年夜。③
【慶宣和】	〔生唱〕是人呵疾忙快分說、是鬼呵合速滅。……聽說罷將香羅袖兒拽。却元來是姐姐。	*六・二三 1 【雙調】【慶宣和】是人後疾忙快分說。是鬼後應速滅。入門來取劍取不迭。兩箇來的近也。近也。……回噴作喜唱一聲啞。却是姐姐。那姐姐。
【喬牌兒】	〔生伶旦〕你是爲人須爲徹。將衣袂不藉。繡鞋兒被露水泥沾惹。脚心兒管踏破也。	*四・二四 3 【牆頭花】當初指望、風也不教洩。事到而今已不藉。④
【甜水令】	〔生說旦〕想着你廢寢忘餐、香消玉滅、花開花謝。猶自覺爭些。	*七・八 5 【脫布衫】幾番待撇了不藉。可證。④ ◎六・二六 1 【黃鍾宮】【待香金童纏令】香消玉瘦、天天都爲他、眼底閑愁沒處着。〔研究〕三四八頁④
【折桂令】		
【水仙子】		
せりふ		
【鶯兒落】	〔生唱〕疎刺刺林梢落葉風、昏慘慘雲際穿窗月。	*六・二一 4 【尾】兀的不煩惱煞人也。燈兒一點甫能吹滅。雨兒歇。閃出昏慘慘的半窗月。③

5-2(18)	5-1(17)						
<p>【粉蝶兒】</p> <p>せりふ</p>	<p>【浪里來煞】</p>	<p>【金菊香】</p>	<p>【醋葫蘆】</p>	<p>【青哥兒】</p>	<p>【后庭花】</p>	<p>【梧桐兒】</p>	<p>【幺】</p> <p>せりふ</p> <p>(張生書簡)</p> <p>【醋葫蘆】</p>
<p>〔生唱〕從到京師。思量心旦夕如是。向心頭橫 倘者俺那鶯兒。請良醫。看診罷。一星星說是。</p>	<p>〔旦云〕書却寫了、無可表意、只有汗衫一領、 裏肚一條、鞦兒一雙、瑤琴一張、玉簪一枚、斑 管一枝。</p> <p>玉京仙府探花郎。寄語浦東窈窕娘。指日拜恩衣 畫錦、定須休作倚門粧。 旦喜不自勝。探花郎是第三名。</p> <p>〔四・一三一〕【雙調】【御街行】須臾和淚一齊封了。 〔研究〕二二六頁④</p> <p>◎七・五一【仙呂調】【滿江紅】僕以書呈夫人。紅娘取而奉鶯。 鶯發書視之。止詩一絕。詩曰。玉京仙府探花郎。寄語浦東窈窕 娘。指日拜恩衣畫錦。是須休作倚門粧。鶯解詩旨曰。探花郎。 第三也。指日拜恩衣畫錦。待除授而歸也。……①</p> <p>◎七・五一【仙呂調】【滿江紅】自是至秋。杳無一耗。鶯修書 密遣僕寄生。隨書贈衣一襲。瑤琴一張。玉簪一枝。斑管一枚。 ①</p>						
<p>*五・一一【黃鍾宮】【黃鶯兒】張生低道。我心頭橫着這鶯 鶯。②</p> <p>*五・五一【牧羊關】……鍼灸沒靈驗。醫療難痊可。見恁姐姐 與夫人後。一星星說與呵。④</p>							

『董西廂』から『西廂記』への繼承(土屋)

5-2(18)			
【醉春風】	<p>〔生唱〕……鶯鶯呵、你若是知我害相思。我甘心兒死。死。四海無家、一身客寄。半年將至。</p>	<p>*五·二一【中呂調】【踏莎行】鶯鶯你還知道我相思。甘心爲你相思死。②</p> <p>*一·二六1【雙調】【豆葉黃】四海無家、一身客寄。『研究』二六頁、九六頁④</p> <p>◎五·五2【尾】沒親熟病染沈痾。可憐我四海無家獨自箇。怕得工夫肯略來看覷我麼。</p>	
【迎仙客】	<p>薄命妾崔氏拜覆敬奉……闌干倚遍盼才郎、莫愁宸京黃四娘。病裏得書知中甲、窗前覽鏡試新粧。</p>		
【上小樓】			
【幺】	<p>〔生唱〕這上面若簽箇押字。使箇令史。差箇勾使。則是一張忙不及印赴期的咨示。</p>	<p>*五·一六1【仙呂調】【滿江紅】……若使顆硃砂印。便是偷期帖兒。私期會子。③</p>	
【滿庭芳】			
【白鶴子】			
【二煞】			
【三煞】	<p>〔生唱〕這斑管、霜枝曾棲鳳凰時、因甚泪點漬胭脂。當時舜帝憐娥皇、今日教淑女思君子。</p>	<p>*七·六1【疊字三臺】……紫毫管未嘗有、是九疑山下蒼竹。當日湘妃別姚虞。眼兒裏淚珠。淚珠如秋雨。點點都畫成斑。比我別離來苦。③</p>	
【四煞】			
【五煞】			
【快活三】			

5-3(19)										5-2(18)							
【聖樂王】	【禿斯兒】	【調笑令】	【金蕉葉】	せりふ	【小桃紅】	せりふ	【天淨紗】	【紫花兒序】	【鬪鶴鷄】	せりふ	【尾】	【四煞】	【三煞】	【二煞】	【耍孩兒】	【賀聖朝】	【朝天子】
		寸木馬戸巾。 〔紅唱〕君瑞是箇肖字、這壁着箇立人。你是箇															
		*八・五1【黃鐘調】【黃鶯兒】誠得紅娘忙扯着道。休厮合造。您兩箇死後不爭、怎結末這禿廝。③															

『董西廂』から『西廂記』への繼承(土屋)

5-4(20)										5-3(19)							
せりふ	【攪箏琶】	【喬木查】	【慶東原】	せりふ	【得勝令】	【鴈兒落】	せりふ	【喬牌兒】	【駐馬聽】	【新水令】	せりふ	せりふ	【收尾】	せりふ	【絳絲娘】	【么】	【麻郎兒】
														難奔。 〔紅唱〕喬嘴臉、腌軀老、死身分。少不得有家			
														④ *五・一八一 【中呂調】【碧牡丹】……煞愜愜地、做些腌軀老。			

5-4(20)

詩	【沉醉東風】	【落梅風】	せりふ	【甜水令】	【折桂令】	せりふ	【鴈兒落】	【得勝令】	せりふ	【落梅風】	せりふ	【沽美酒】	【太平令】	【錦上花】	【清江引】	【隨尾】	
	【巨唱】 不見時準備着千言萬語。得相逢都變做短嘆長吁。……及至相逢一句也無。則道箇先生萬福。						【巨唱】 他曾笑孫龐真下愚。若是論賈馬非英物。										
	*八・三? 【尾】 比及夫妻每重別離。各自準備下萬言千語。及至相逢沒一句。①						*三・一三 【尾】 文章賈馬豈是大儒。智略孫龐是真下愚。英武笑韓彭不丈夫。②										

『董西廂』から『西廂記』への繼承(土屋)